



世界遺産 韓国の書院

記録文化と
祭享

(財)韓国の書院統合保存管理団

世界遺産 韓国の書院

記録文化と
祭享



(財)韓国の書院統合保存管理団

世界遺産 ‘韓国書院’

記録文化と祭享

目次	発刊の辞	5
	世界遺産‘韓国の書院’	7
	韓国の書院の世界遺産としての価値	7
	9つの書院からなる連続性のある資産	9
	顕著な普遍的価値	12
	記録文化	19
	懸板	19
	記文、題詠	21
	書院の古文書	24
	古書と冊板	27
	祭享儀礼	31
	祭器、祭物、祭服	31
	祭享の種類と手順	31
	享祀準備	32
	享祀儀礼	33
	書院の記録文化と祭享儀礼	35
	榮州 紹修書院	37
	咸陽 濫溪書院	63
	慶州 玉山書院	83
	安東 陶山書院	113
	長城 筆巖書院	139
	達城 道東書院	163
	安東 屏山書院	183
	井邑 武城書院	207
	論山 遯巖書院	225

発刊の辞

李培鎔

(財)韓国の書院統合保存管理団 理事長

世界遺産‘韓国の書院’は朝鮮時代の教育的、社会的活動で持続的に広く普遍化された性理学の教育体系と建物を創造した卓越性が認められ、2019年7月に世界遺産リストに登録されました。性理学の教育体系は、書院が保有している有・無形の多様な文化遺産をもって表現されており、建物とともに9つの書院が持つ記録物と祭享儀礼は‘韓国の書院’の顕著な普遍的価値を裏付ける重要な要素です。

連続性のある資産として構成された9つの書院には、現在までにも脈々と続いている記録物と祭享儀礼があります。これらはまさに韓国の書院文化を作り、享有した士人たちが追求した品格のある精神世界を私たちに見せてくれます。これにより、再び韓国の書院文化の伝統と性格を気づけられると考えております。

(財)韓国の書院統合保存管理団は、韓国書院の有・無形遺産の価値を知らせるために、2013年に韓国の書院の図録3種(懸板と記文、古文書・古書・冊板、祭享儀礼)を発刊したことがあります。今回、これらの3種の主要内容を改めて掻い摘み、増補版として発刊することになりました。これをもって別冊で発行された既存の図録の使用性を高め、9つの書院がそれぞれの特性を持って伝承した文化性格を振り返りたいと思います。そしてこれと共に世界遺産登録の価値や経過など新たな内容を込めようとしてしました。

本書は総論、書院概説と9つの書院の記録文化の性格を懸板と記文、古文書・古書・冊板、祭享儀礼の順で調べ、その特性と世界遺産としての価値を整理し、続いて9つの書院別に独特の記録物と祭享儀礼資料を図録で再編しました。そして9つの書院の記録文化資料リストを貼附資料として収録しました。

本書の執筆と制作に参加した方々に感謝します。本書をもって、連続性のある資産の9つの書院に対する統合広報と、さらに韓国の書院文化がより上品且つ豊かで、教育遺産としての顕著な普遍的価値をさらに輝かせる資料になると期待します。

2021年12月

世界遺産‘韓国の書院’

韓国の書院の世界遺産としての価値

500年という長い歴史に耐え、完全に継承され保存されてきた‘韓国の書院’は、2019年7月の第43次世界遺産委員会で世界中の人々が共に守るべき大切な世界遺産となった。韓国の書院は、朝鮮時代の16世紀半ばから17世紀半ばまで建立された私立学校で有・無形の価値が込められた韓国の伝統文化遺産である。韓国の書院は、長い歴史の流れの中で祭享(Veneration)、講学(Learning)、交流と遊息(Interaction)機能により性理学の発展を促進させ、地域の教育、文化、知性史の水準を高めるのに大きく寄与した代表的儒教教育機関であり、知性文化の拠点であった。

朝鮮時代の書院は、性理学教育と先賢の祭享を目的として設立された私立教育機関で、伝統社会の学問と道徳、歴史、そしてアイデンティティが込められている。書院では、学問と道徳の人性を備えた人間を養成しようとした。また、地域の賢人たちの交流場所であると同時に世論と公論助成の社会活動場所でもあった。書院の建物は、性理学が重視するバランスと節制が反映され、壮大であったり華やかであったりではなく、質素な姿で周辺景観とも調和を成し遂げている。

韓国の書院の始まりは、豊基郡守の周世鵬(1495～1554)が1543年に慶尚道順興地域に建てた白雲洞書院を嚆矢とする。1550年には李滉(1501～1570)の努力で白雲洞書院は政府から‘紹修書院’として額を賜れ、最初の賜額書院となった。以後、書院は全国的に拡散され、朝鮮時代を導いていく主導的な役割を果たすようになった。これらの書院の中で世界遺産リストに登録された9つの書院のほとんどは書院の初創期に建立され、1871年の書院撤廃令から除かれた47ヶ所(書院27、祠宇20)の書院の一部である。このように9つの書院は、建立から書院の主な機能と特徴を完全に保有し管理し世界遺産としての‘顕著な普遍的価値’を維持している。

韓国の書院は、多様で豊かな記録文化と無形の祭享儀礼を通じて、場所と建物の真実性と完全性が証明される非常に特別な遺産である。遺産というのは形態的に分類をし有形と無形に分け、それによる保存を図るが、その中に内在する価値は容易に有無形に分けることができない。ある遺産の価値は、目に見える類型的な要素とともに、その中に込められた精神、遂行した機能、呼び起こす感情、連係された歴史的人物と事件などがすべて絡み合っ

て総体的に形成される。

韓国の書院は、教育と祭享、人間と自然の天人合一を追求する伝統思想を根幹とし、韓国知性文化の拠点としての役割を担った。書院の中に伝わる記録物と祭享儀礼は、類型の建物を通じては容易に近づきにくい書院の内実な過去と、書院を作り享有した士人らが追求した品格ある精神世界を私たちに見せる。

韓国の書院は、中国から伝わって韓国社会の多くの部分に基礎となった性理学教育を増進した教育機関の卓越した証拠であり、書院にて郷村の知識人らが教育を効果的に行うための教育体系と類型的構造物を創造した。書院の主要空間は、先賢を慕いまつる祭享空間、経書を学習する講学空間、学習の緊張から脱し自然を鑑賞、休息しながら知識を交流する遊息空間から構成されている。これら三つの空間は韓国書院の代表的な空間であり、付随的には三つの空間の機能を支援し管理する支援空間がある。これらの空間の中で、知識人らは性理学の經典学びと研究を行い、性理学を基本とした世界観と理想的人間像をつくるために努力した。さらに、郷村の知識人は、この遺産を基盤とした様々な社会的・政治的活動を通じて、性理学が社会全般に伝播されることに貢献した。



榮州 紹修書院
主享人物：安珣(1243-1306)



咸陽 濫溪書院
主享人物：鄭汝昌(1450-1504)



慶州 玉山書院
主享人物：李彦迪(1491-1553)



安東 陶山書院
主享人物：李滉(1501-1570)



長城 筆巖書院
主享人物：金麟厚(1510-1560)



達城 道東書院
主享人物：金宏弼(1454-1504)



安東 屏山書院
主享人物：柳成龍(1542-1607)



井邑 武城書院
主享人物：崔致遠(857-?)



論山 遯岩書院
主享人物：金長生(1548-1631)

9つの書院からなる連続性のある資産

世界遺産は大きく文化遺産、自然遺産、複合遺産と分けられる。他にも人間と人間を取り巻く自然環境の間における相互作用の多様性を表現する文化的景観があり、特別な類型の遺産として国境を越える資産(Transboundary properties)と連続性のある資産(Serial properties)がある。連続性のある資産とは、登録しようとする遺産が一つ以上からなっているとき、これを連続性のある資産と呼ぶものであり、ひとつの締約国によるものであれ、複数の締約国による推薦であれ、その全ての遺産を連続性のある資産という。連続性のある資産は、複数の遺産をひとつにまとめて申請するものであるため、遺産全体を合わせてどのような価値が見せるかを浮き彫りにされる必要がある。また、世界遺産の核心である顕著な普遍的価値に基づいた登録基準を設定し、遺産の完全性と真実性を立証させねばいけない。さらに、それぞれの遺産が位置する連続性のある資産の全体的な遺産保護のために統合管理できるシステムも必ず備えるべきである。

これらの連続性のある資産の定義と登録申請条件は、次のように要約できる。

- 連続性のある資産は、連係性が確然に現れた2つ以上の構成物を含むべきである。
- 構成要素は、時間の経過とともに文化的、社会的、または機能的な連係性が反映されるべきである。
- 連続性のある資産の構成物は、遺産の顕著な普遍的価値に寄与すべきであり、無形の特性が含まれる。
- 連続性のある資産を構成する遺産に対する管理の容易性と一貫性を考慮すべきである。

世界遺産リストに登録された‘韓国の書院’は、一つの地域にある単一の書院ではなく、異なる地域に位置する9つの個別書院が一つの遺産にまとめられ登録された連続性のある資産である。韓国の書院が連続性のある資産として登録された理由を世界遺産委員会の登録決定文には次のように記されている。

‘韓国の書院’は、朝鮮時代(16世紀半ば～17世紀半ば)における性理学の教育機関の類型を代表する9つの書院で構成された連続性のある資産として、韓国の性理学と関連された文化的伝統を現す優れた証拠である。この遺産は、韓国の中部と南部の地域に位置する紹修書院、濫溪書院、玉山書院、陶山書院、筆巖書院、道東書院、屏山書院、武城書院、遯岩書院の9つの書院で構成されている。(以下省略)

連続性のある資産である韓国の書院は、韓国における性理学教育機関の典型として、書院の特徴がよく保存された遺産である。これらは韓国の書院が一つの類型として確立される過程が見出せる事例であり、9つの個別書院を通じて韓国書院の価値を次のように説明することができる。

韓国初の書院である 栄州 紹修書院

紹修書院は韓国で最初に設立された書院である。韓国書院の講学、祭享に関する規定を最初に提示し、以後に建立される書院に影響を与えた。これに関連された文献資料も豊富である。紹修書院は教育機関として、書院が講学、祭享、交流と遊息などの機能を基本的に備えることを提示した。

地域儒林の自発的建立と韓国書院の典型的な配置構成を持つ 咸陽 濫溪書院

濫溪書院は韓国において2番目に建てられた書院で、地域の士林によって設立された最初の事例である。建築的には韓国書院建築の整形的な配置方式が初めて登場した事例である。それぞれの主要領域を区分して一つの軸線上に配置したのは、以後に建立される書院配置方式の典範となった。

記録文化に関する出版活動の中心地であった 慶州 玉山書院

玉山書院院は、出版と蔵書の中心機構としての書院の役割を確立させた。建築的には書院領域の前に楼閣を導入し、交流と遊息の機能を効果的に遂行させた。玉山書院以降、書院に楼閣を設置することが一般化された。

学派中心の書院建立の代表的事例である 安東 陶山書院

陶山書院は、書院が学問と学派の中心機構として発展した韓国書院の発展過程を立証する。祭享人物の講学処をもとに建立され、講堂が非対称的に位置しているのが特徴である。卓越した自然景観にもとづいて一帯の景観を描いた様々な作品が残っている。

書院の運営に関する文書や記録がよく残っている 長城 筆巖書院

筆巖書院は、韓国の東南部地域を中心に始まった書院運動が西南部地域まで拡散する過程を立証する。記録物を通じて書院の経済的運営方式が分かれる。この書院は、傾斜地形を利用していた以前の書院とは異なり、平らな地形に適した建物配置方式を適用した。

自然地形を利用して建てられ建築配置に優れた 達城 道東書院

道東書院は、書院における教育方式の具体的な側面を立証する。傾斜地を活用した書院の建物配置を卓越に具現した。建物ごとに複数の壇を造成し、外部の自然景観を視覚的に受け入れるように活用したのは、傾斜地書院の造成技法をよく示す。

教育機関から世論収斂処への役割が拡大された 安東 屏山書院

屏山書院は、書院を教育機関のみならず万人疏など士林の公論場としても拡大された士林の活動中心地としての書院の機能を立証する。多くの学者が収容できる大規模な晩対楼は自然景観との調和が優れている。

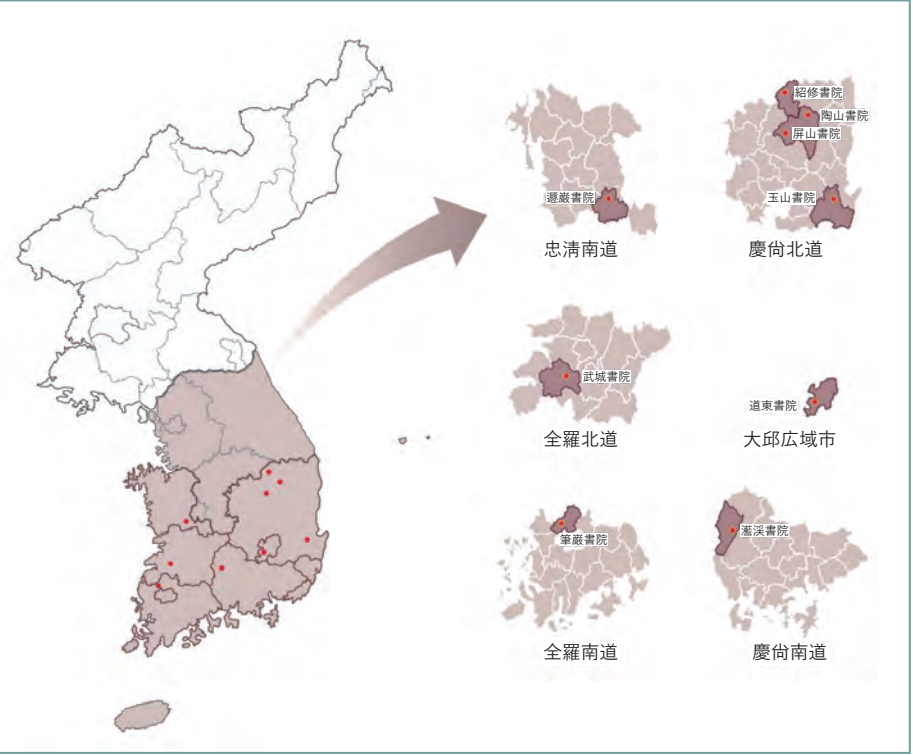
郷約を通じた郷村教化の場であった 井邑 武城書院

武城書院は韓国書院の発展過程において性理学理念が地域単位の知識人集団を中心に社会全般に拡大される段階に属する。性理学的社会秩序を構築し、郷村を教化させるために教育と社会的根拠地に設立された。

性理学の実践理論である礼学議論の産室であった 論山 遯岩書院

遯岩書院は、性理学の実践理論である礼学を韓国的に完成させた拠点として、凝道堂を正寝理論に遵って建てた。凝道堂は正寝理論を韓国の建築言語に再解釈させ、完成させた優れた建物として韓国に残られた唯一の事例である。

世界遺産‘韓国の書院’の位置図(9つの書院)



顕著な普遍的価値(Outstanding Universal Value)

世界遺産の核心は、遺産の顕著な普遍的価値の保護である。そして世界遺産登録申請書の核心は、遺産に対する顕著な普遍的価値の立証である。世界遺産制度で語る顕著な普遍的価値は“国境を越えるほど顕著であり、今日及び次世代のすべての人類にとって共通に重要であること”と記るされている。また、顕著な普遍的価値が認められ世界遺産リストに登録されるためには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で記るされている下記の登録基準のいずれか1つ以上に合致するとともに、真実性や完全性の条件を満たし、締約国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要である。ここに‘韓国の書院’世界遺産登録申請書に記載された顕著な普遍的価値を立証するための内容は次となる。

登録基準(Criteria)

(iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。

‘韓国の書院’を代表する9つの書院は、朝鮮時代の教育及び社会的活動で広く普遍化された性理学の顕著した証拠である。この遺産は16世紀半ばから17世紀半ばの間に建てられ、教育に基づいて形成された独特な歴史の伝統と性理学の価値を表している。郷村の知識人たちはこの遺産を通じて性理学教育を適切に遂行するための教育体系と建物を創造し、全国にわたって性理学の伝播に寄与した。

区 分		書院発展	教育体系	講学特性	祭享特性	士林活動
1	紹修書院	制度導入	●	●	●	◎
2	濫溪書院	設立主体	●	◎	●	●
3	玉山書院	出版活動	●	◎	●	●
4	陶山書院	学脈形成	◎	●	●	●
5	筆巖書院	運営方式	●	◎	●	◎
6	道東書院	教育体系	●	◎	●	◎
7	屏山書院	社会活動	◎	◎	●	●
8	武城書院	教化活動	●	◎	◎	●
9	遯岩書院	礼学深化	●	●	●	◎

● 卓越した充足 ◎ 平均水準の充足

真実性(Authenticity)

9つの書院は、形態とデザイン、資材と構成物質、伝統的な技法と管理体系、立地と周辺環境の側面で高い水準の真実性を確保している。9つの書院は、書院の設立運動の初期にあたる16世紀半ばから約1世紀期にわたって建立された代表的書院であり、歴史の発展過程のなかで毀撤されず原型が維持されている。祭れた人の縁故及び景観を含む立地環境、祭享空間、講学空間、交流と遊息空間の建物配置、各々の建物の類型的な形態、木材と瓦が使用された物質構成、保存管理の体系など本来の姿が維持されている。

形態とデザインの側面から、9つの書院は書院の歴史の建築的具現が観られる。韓国の書院は、祭享、講学、交流と遊息空間の有機的結合を一つの典型的な形態に仕上げ、それを今まで変形なしに完璧に保っている。また、韓国の木造建築技法と座式型生活慣習をもとに独自の建築形態を作り出した。

資材と構成物質、伝統的技法と管理体系の側面から、韓国の書院は書院を設立する当時の建築的結果物をそのまま立証している。現在までも朝鮮時代の建築技法と資材をもって最小限に補修されており、真実性と完全性を損なわないよう管理されている。伝統的な技法をもとに宮建された原型に応じて、現在は公認された技術人力と訓練を受けた職人を使い最小限の補修が行われる。9つの書院は文化財庁と当該地方自治体によって直接管理され、伝承された伝統技術が適用される。木造建築に危害を与えるシロアリ、腐食、火災などについて公認された専門集団の管理を受け、予防措置を行う。

9つの書院は記録遺産、無形遺産に属するものもよく保存し伝承している。書院を経た人物たちが残した典籍、文集、記文、木板などはよく保護管理されており、祭享はこれまで創建当時の姿そのまま受け継がれて施行されている。記録遺産と無形遺産の両方とも、個別遺産が持続された伝統を現している。

立地と周辺環境の側面から、9つの書院は設立当時に適用された性理学的景観認識をそのまま維持している。それぞれの書院は野景、溪景、山景、江景などの特色を持っており、これは韓国の書院が持っている重要な価値として境内の建物を含む広い範囲の環境が重要であることを現す。立地と周辺環境は大韓民国の文化財関係法令に基づいて現在までよく保存され、書院の真実性を高めている。9つの書院は数世紀にわたって自然災害、火災、戦争など様々な外部的要因による変化を経たが、現在まで真実性を高めるための努力を続けている。再建、修理、そして移建過程でも、祭享、講学、交流と遊息の空間配置を貫徹させ、韓国書院の特徴を維持した。9つの書院は開発圧力が少ない場所に位置し、本来の景観が忠実に保存されており、景観的価値が失われていない。このような価値保護のために9つの書院に設定された境界は文化財保護法など各種制度により十分に保護されている。

9つの書院は、創建から現在まで、所有権の大きな変化なしに儒林と門中によって運営されている。現在も個別遺産では院会という自治組織を構成し、当該遺産の管理、運営、活用などに関する議決に参加している。また、各々の書院に係わる各種の古文書や記録遺産も忠実に保護、管理されており、遺産の真実性確保に寄与する。

完全性(Integrity)

‘韓国の書院’は、韓国における性理学の発展と書院類型の定立過程を証明する最も重要な9つの書院で構成されている。各々の構成要素は、集合的に顕著な普遍的価値を現し、それぞれが完全な書院としての機能が修行できる完全性を備えている。

9つの書院は、朝鮮時代の書院の必須空間要素である祭享空間、講学空間、交流と遊息空間を構成する各々の建物のみならず、元の地形、周辺環境を完全に維持している。祭享空間を構成する祠宇とその内部の位牌、典祀庁などが完全に存在されており、講学空間をなす講堂と斎舎、図書館、各建物の偏額などが完全である。楼閣など交流と遊息空間の構成要素もまた完全で、周辺の景観、地形などが完全な姿で残されている。書院周辺の景観の中で遺産の顕著な普遍的価値を立証する重要な部分は、すべて遺産区域(Property zones)や緩衝区域(Buffer zones)に含まれている。

9つの書院は都市化、近代化された地域と離れた場所に位置しており、立地と所有関係、法的保護体系の側面から、予想される危害がほとんどない。人工的な開発や自然災害による損傷を予防するための多角度の法的措置が設けられている。風化によって衰退された部分については、文化財保護法の体系の下で公認された専門技術者によって最小限の補修のみで原型を維持している。遺産自体と周辺地域まで開発が制限されており、軽微な補修でも文化財委員会の審議と監督を経て最小限の範囲に制限される。9つの書院は、韓国書院の特性を代表するのに十分な範囲の空間が法的保護区域として設定され、開発などの悪影響からの被害を防止し、書院の原型を保存するための持続可能な保存管理計画が樹立されている。

保護と管理(Protection and management)

‘韓国の書院’は9つの書院からなる連続性のある資産である。韓国の書院は、顕著な普遍的価値を構成するすべての要素を完全に含み、書院の真実性と完全性の効果的な保護のために境界が設定されている。其のうえ、書院の保護・管理は、大韓民国の文化財保護法と当該地方自治団体の関連条例などを通じて法的保護を受けている。また、9つの書院は現在、国家史跡として指定され、該当書院はもとより周辺地域までも保護・管理されている。

9つの書院は、祭享-講学-交流と遊息という機能と有機的な空間構成を通じて書院の価値を現している。これに各々の機能に当たる建物と施設物が遺産区域に含まれ、書院の立地と周辺環境などを考慮した森林、農耕地、川、溪谷などが緩衝区域に含まれて保護・管理されている。

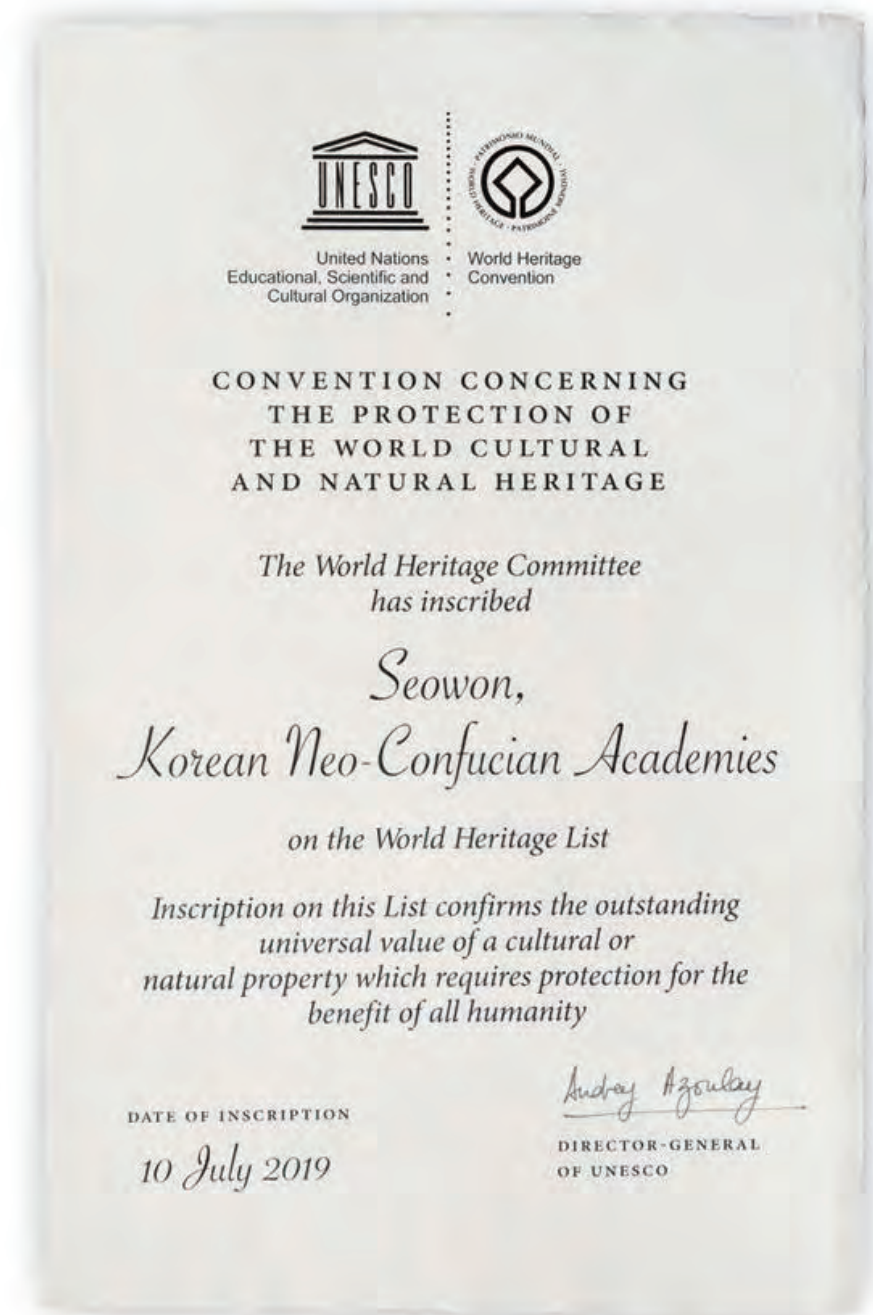
現在まで、9つの書院を脅かす開発や環境圧力など遺産に影響を及ぼす深刻な要因は軽微である。これは文化財保護法によって周辺地域の土地利用と開発行為が厳しく制限されているためである。しかし、韓国の書院の大部分が木材建物である点を勘案し暫定的に発生できる火災に備えるため、消火設備及び常時監視体系を構築し、災害及び災難に対応している。また、世界遺産登録以後、訪問者と観光産業による書院の保護・管理への影響は今後増大すると予想されるが、当該書院と地方自治体で書院保存管理計画を樹立して影響を最小化できる多角的な対策を講じている。

9つの書院は、書院別に遺産が属する地方自治団体が設けた中長期事業に基づいて保護及び管理されている。そして、連続性のある資産の効率的な統合管理のために(財)韓国の書院統合保存管理団を設立した。韓国の書院は、持続的な保護・管理のために国際的な保護原則を遵守しつつ、文化財庁、書院所在地方自治団体、(財)韓国の書院統合保存管理団が相共にモニタリング指標を設け、専門家と市民による定期的な保存現況が点検できるようにしている。

現在、9つの書院の周辺地域は文化財保護区と歴史文化環境保存地区として指定されており、文化財庁文化財委員会の審議を通じて建築物や構造物の新築、増改築が厳しく制限される。連続性のある資産として9つの書院の所在するそれぞれの地方自治団体は、書院と周辺環境を保護、管理するために当該書院の保護管理計画を樹立し、中長期的に書院を整備、補修しており、政府はそのための予算を支援する。予算は国費と地方費で構成され、書院の所在する地方自治団体で執行される。各書院と地方自治団体では、保護、管理のほか、市民が書院を容易に接近でき、よく理解できるように書院の活用方案を樹立して施行している。

このように9つの書院で構成された‘韓国の書院’は、独自の祭享儀礼と儀式、慣行を長く持続させ伝承させており、図書館や出版機能を含め、多様な文化遺産や歴史記録物を生産、保存した処でもある。その点で書院は儒教文化の多様性と個性が集約された文化遺産であり、有・無形資料が集約された宝庫であり展示館である。こうした韓国の書院は、ただ過去の剥製された歴史遺物ではなく、今も生きている精神文化の本産であり、人性教育の解答が見つけれられるところである。そのため、私たちは書院が持つ世界遺産としての価値と真正な教育の機能を蘇らせ、世代間のコミュニケーションの場にしていくべきである。

韓国書院の教育は知識のみならず、人間の心性を絶えず正す人性教育が中心にあった。其ゆえにそこでの教育は立身養名ではなく、為己之学が目標であった。それを実践するために孔子ではなく地域の先賢を祀り、師匠の道に従って郷村の教化を導きながら性理学の理想世界を具現しようとした。したがって、韓国の書院が志向した多様な機能と役割は、今日、人類が共同で守り伝承させるべき大切な教育遺産である。韓国の書院は、ユネスコ世界遺産が求める顕著な普遍的価値を備えた人類の文化遺産である。そのため韓国の書院の歴史文化価値を世界に知らせ、現在と未来世代のために生きている有・無形遺産として保存するために、私たち全員が努めるべきである。これは未来世代に対する私たちの課題であり責任でもある。韓国の書院が、過ぎ去った過去の歴史遺物ではなく、未来に向けた力となり、韓国の遺産を越えて世界に、未来にインスピレーションを与える人類の遺産に生まれ変わることが望まれる。



韓国の書院は儒教の礼が具体的に実践され儀礼化された処である。書院は教育の講学機能とともに、祭享儀礼を通して先賢の学徳と行誼を崇めた。

書院の幼生たちは、普段は講堂に集まって文を勉強し、毎月初日や望日など朔望に焚香する謁廟をし、春と秋に書院で二度の享祀を行った。士族らはこれを通じて地方社会を教化しようとしながら、書院を先賢に対する祭享空間として機能させた。

記録文化

■ 懸板

韓国書院には、各書院が持っている文化史的内容、人的交流の実状を示す懸板類の資料がある。韓国の書院では、聖賢が残した經典や有名な学者の文から引用して建物の名称にし、当代の名人から字を受けて木板に刻んで建物に掲示した。特に政府が下賜した賜額書院の懸板は書院の象徴であり、字も当代の最高の名筆が書いた。これら書院の懸板は、設立目的と機能に合わせて教育理念や哲学は無論のこと、經典や聖賢が残した文章から引用した心身を養う内容を含んでいる。

懸板類の資料は大きく、堂号、扁額、記文、題詠に分けられる。堂号は殆どの建物の扁額として建物が持つ象徴的な意味と価値を代弁し、記文資料は書院の特性と歴史性、真正性が証せる文化遺産として、書院の由来とその意味が余すことなく含まれ書院の歴史と文化史的性格を示している。題詠は、書院の景観や書院文化を文学的かつ芸術的に表現した資料で、作者と書院との関連性、人的交流、作者の文学と思想などが調べられる資料である。

堂号と扁額

韓国の書院の祠宇、講堂、斎舎、門楼などの建物には、堂号が懸板として懸けられており、これを扁額ともいう。堂号の懸板は儒教的寺院としての役割をになう書院の代表的な象徴といえる。堂号は建物の名前からして、まず建物の用途を表し、それに相応しい様々な名前が付与される。そしてそこには役割以上の重要な象徴性が含まれている。

書院の独特した教学精神が講堂と東・西斎の堂号に含まれており、門楼と祠堂の堂号からも書院に祭享される先賢の志趣と節概が感じられ、懸板を書いた作家を通じても書院の学統が表される。

門楼、講堂の懸板

門楼の堂号から書院の立地と景観の特性が儒教的な学習と涵養に寄与する意味を読める。栄州の紹修書院には正式の門楼がなく景濂亭がその役割をになう。小さな亭の景濂亭に上がると、細い川の竹溪川と敬の字が刻まれた岩（敬字岩）、そして松林からなる翠寒台が眺められる。

安東にある屏山書院の門楼の名称は晩対楼であるが、それは中国の詩聖と呼ばれる杜甫の詩句‘翠屏宜晩對’から引用したものである。青く映える屏風のような崖は夕方に眺めるに良いという意味である。屏山書院の前に流れる洛東江向かいの屏風のように東西を取り囲む山々は、日中より太陽が西から斜めに照らされる時、洛東江の水と屏山の録音が日差しに反射され、翡翠の色で恍惚に輝く。

長城に位置している筆巖書院の門楼の廓然楼は、程灝の言った‘廓然而大公物來而順応、つまり広々として私意がないと物来りて順応するなり’から取ったものである。井邑にある武城書院の門楼の絃歌楼は孔子の弟子である子游が武城の受領のときに民を礼樂を通じて治められた故事から意味をとったものである。その堂号は、民をよく教化できる経世的学問に教学の伝統を置くべきという意味を含む。咸陽にある瀟溪書院の門楼は風詠楼で、記文にはその楼閣に上がると広がる心と平安な精神をもって自然の中に逍遥した鄭汝昌先生の風詠する気象が仰げるため‘風詠楼’と名付けたと記されてるいる。瀟溪書院の東・西斎の前には小さな正方形の池があり、鑑賞する遊賞空間である。池を玩賞する床の堂号である詠梅軒と愛蓮軒も、門楼の風詠楼とともに瀟溪書院の自然合一する氣相を表す。

一方、講堂の堂号を通じては書院の固有した教学の伝統が垣間見られる。安東に位置する陶山書院の講堂である典教堂の‘典教’は教育をつかさどるという意味である。典教堂で師匠の居所である協室の名前は閑存斎である。退溪李滉の学問は、敬を特に強調した。閑存斎という堂号には師匠が身に備えるべき姿勢として‘邪惡さを防ぎ、真の心を保存する経’が提示されている。

慶州に位置する玉山書院の講堂である求人堂には心を放逸せずに一心で仁を追求するとの意味が含まれており、達城に位置する道東書院の講堂である中正堂の堂々とした姿は、敬の心の姿勢としての仁と義の実践を通じて聖人の境地である中と正へ進むという道東書院の教学精神が堂号の意味体系を通じて象徴化されたのである。

長城に位置する筆巖書院の講堂である清節堂は清廉潔白な節概を守り、仕官の道をやめた金麟厚の汚れていなかった節概を表象する。このように、門楼の廓然楼、祠堂の祐東祠、講堂の清節堂という堂号は、一貫して金麟厚の大きくて高い節概を象徴している。

論山の遯巖書院の講堂である養成堂の養成は、心の養いのために『孟子』の‘存其心養其性所以事天也、つまりよき心を保ち、本性を養うことこそ、天に仕える道である’という節からとった堂号である。本性を養うということは、すなわち仁を言うことで、養性を追求する遯巖書院の教学精神が堂号として体系的に象徴されたものである。

講学の東・西斎の懸板

玉山書院は建物の配置が非常に整然で、建物の堂号の意味付与も体系的である。玉山書院の講学建物の堂号は、穎才らが善を撰んで真理を明らかに、自分を振り返ることで誠になれる方法から修学するという兩進斎、敬から内を直ちにし、義から外をまっすぐに修行するという偕立斎がである。学問に入り学問を学び心を養い仁を追求しながらついに仁を体得する修学の過程が、玉山書院の外三門から祠堂に至るまでの堂号に位階的に含まれている。

陶山書院の学生が学習する東斎の堂号は‘博約’であり、西斎の堂号は‘弘毅’である。博約斎・弘毅斎の堂号が象徴することは、師匠の李滉が生涯に堅持した敬を教えの原則とし、学生らの知識を広げ行動を礼に揃える(博文約礼)という内容の勉強をし、‘広い度量と堅い意志(弘毅)を持って一生努力する姿勢で敬の勉強に臨めよう’ということである。陶山書院の教学伝統である敬の思想が講堂を中心とする各建物の堂号に含められ象徴化されたのである。

道東書院の講学空間である東・西斎は、居二斎と居義斎である。講堂の堂号が中と正を表象しており、その前にある東斎が仁、西斎が義を象徴している。敬の心の姿勢をとり仁と義を実践することで、聖人の境地である中と正に進むという道東書院の教学精神が堂号の意味体系を通じて象徴化されたのである。

論山にある遯巖書院の東斎は居敬斎で、西斎は精義斎である。居敬斎と精義斎は『近思録』の‘敬を維持することで内を直ちにし、義を実践することで外を正しくするのがまさに仁である(敬立而内直 義形而外方)’という意味である。したがって、居敬斎と精義斎は、養性に求められる仁を達成するための学習の姿勢と方法が含まれている。学習する士人らは、‘居敬’と‘精義’をもって養性し、‘仁’を果たすべきという遯巖書院の教学精神が堂号から体系的に象徴されたのである。

■ 記文・題詠

記文

韓国の書院の記文資料は、扁額堂号や題詠文と比べると、記録内容の事実性から大きな差別性を持つ資料である。第一、記文資料は書院の変化や特別な事案に対する具体的な過程、状況、内容を説明しているものが殆んどである。

また、その記文が掲板されるのは、当代の各々の書院における士林の公論と合意の結果からなる。つまり、撰者と書者の選択も当時の地位、意味、功績によって選ばれ、それに相応しい意味が与えられているわけである。したがって、書院の‘歴史や変遷史’を反映した資料として掲板された記文資料はいったん‘讀え知らせる必要’があるため‘選ばれ掲げた’多様な歴史資料である。

韓国の書院の記文資料は非常に多様で総合的である。それを内容から分けると、おおよそ建物の創建と重修沿革、人物と祭享、教育講学、書院の財政経済と関わる資料などと分類できる。建物の記文すなわち創建記・上梁文・重修記などが50件余りとして過半数を上回り、祭享人物や祭享に関する記文が20件余り、そして院規・学規・節目など教育や講学と関わる記文が20件余りである。

創建と重修沿革

書院の創建と重修、賜額、移建など史跡に関する資料は創建記、上梁文、重修記、改建記などの形で伝えられ、その背景と過程、財源の準備及び関連人物などが記されている。創建記からは1561年の姜翼と1573年の許曄が各々撰んだ玉山書院記が注目される。韓国の書院の創設期にあたる16世紀半ばに作成され、記文の内容も書院が設立される当時の雰囲気と創設の意味が正確に伝えられている。

濫溪書院記の場合、設立を主導した姜翼が鄭汝昌を祀る書院を建てる動機、書院の規模、講堂と齋室の命名、そして竹溪書院の次に建てた濫溪書院を居処とする士人に対する期待などが記されている。

玉山書院記には、李彦迪の亡くなったあと彼を慕う慶州の士林が意志を集め、慶州府尹と慶尚監司に書院の建立を要請した事情が詳細に記されている。また、書院建設をきっかけとして慶州が鄒魯之郷となり、国家に必要な人材を排出することが望まれるとの希望も込められている。

一方、1603年に鄭曄が撰んだ遯巖書院の養性堂記には、書院の創設の由緒となる養性堂の講学伝統と当時の状況が記録されている。この養性堂記は、現存する遯巖書院の懸板の中で時代が最も早いもので、沙溪金長生が雅閑亭の址に養性堂を建て、講学活動を始める当時の状況が記されたものである。これは遯巖書院の沿革で非常に重要な資料であり、当時の関連人の面貌と学問的連帯が窺い知れる。

致祭と人物記文

祭享人物に対する記文はかれらの学問や道学、行跡を頌するもので、傳教謄録、文集発刊、画像賛、祭享祝文などがある。国王の正祖が1792年(正祖16)に下した傳教文は陶山書院に懸けられている。そこには奎章閣の閣臣であった李晩秀を書院へ差し向け致祭させ、科試を行なうという内容が書かれており、字は正祖の傳教を受け取り李晩秀が書いた。

武城書院には、1834年に孤雲崔致遠の桂苑筆耕を刊行した事実について朴海彦が撰んだ武城書院崔先生文集重刊記が板となり揚げられている。

教育、講学記文

書院は地域と学脈ことに多様な教育的・文化的特性を持っており、書院ことに独自の教育思想と哲学をもとに独自の教育方式と運営形式を備えている。それが示される資料として書院規約、節目、立議、完文、講案、講規、学規などの記文がある。その代表的な事例である陶山書院院規は、退溪李滉が撰んだもので、正堂の北壁に掲げている。それは伊山書院の教科課程、学習方法などを定め書院の規則である「院規」であり、以後、嶺南地域における書院院規の模範となった。紹修書院の白雲洞書院令(1545年)は、最も年代が早い書院学則で、学生への飲食の提供、書庫の出入り、祠堂の参拝者に対する礼と転送など基本的な規定が記されたもので、以後、複数の書院規約の模範となった。濫溪書院の院規には「癸丑四月重刊」と記されており、院生の読書すべき書冊と書院での生活規則及び礼節が非常に詳しく列挙されている。

これらの院規と学規に関する資料は古文書としても多く残されており、講会録、考講録、講習礼節目、講礼笏記のような非常に具体的な資料も伝わっている。

財政、経済関連記文

書院の財政および経済に関する資料としては、田畜案、奴婢案、額外院生案、院保案、院直案、そして書院村除役などに関わるもの、書院の重修や居接のための官・士族の現物贈与と事案ことにつくられた義損と各種扶助記などがある。一方、書院村に対する免税・免役を願う通文、上書、所志類が記文として記されたり、確証された事実を懸板にして証拠としたこともある。

玉山書院の傳教騰書(1676年)は、書院の募入者が散じ士人らが学問に専念できないという経筵での議論により、国王の肅宗が文廟に従享された人物を再び祭享する複数の書院の募入者を勿侵するよう指示した傳教が記されている。紹修書院の乾隆十五年立案(1750年)は官庁に属されている4号を書院の仕宦として使わせるに証憑された文書で、18世紀の紹修書院の経済的基盤が窺える資料である。

題詠

書院の題詠詩は、各々の書院の主人公とその後学が書院を建立した背景や理念、そして書院の周辺景観の自然を見て感じた心懷を詩を通じて形象化した作品である。これら題詠詩は、書院を訪れる人々に文学的な想像力を引き起こすのみならず、先祖らの自然を敬畏した美しき心構えまで確認させる。

題詠詩の内容を見ると、書院の全体を詠んだ詩と特定した建物について詠んだ詩とで分けられる。書院を総括して詠んだ詩は、書院の主な人物と学徳を尊慕し、直接に学べなかった切ない心が込められている。筆巖書院の懷河西、河西先生などの作品がこれに当たれる。反面、書院空間の特定した建物や周辺風光の美しさとその中に内在した真の価値を

主に込めた詩としては、紹修書院の景濂亭と遯巖書院の養性堂題詠、養性堂十景などの作品が挙げられる。

書院に対する題詠詩が残された場合、後学者がその詩に対する次韻詩を残す。紹修書院の周世鵬は、そびえ立った山の色を恭敬する姿で受け入れ、小川の音は亭に隠居された人の心と感通していると謳った。景濂亭に隠居して本性を涵養させる人の恭敬する姿勢が山の色と水の音と感通するという所懐を詠んだのである。景濂亭には多い詩の板が掲げているが、慎斎周世鵬と退溪李滉が詩を残した後、時代と歴史は異なるが多くの後学者が景濂亭に上って先賢を思い出し周辺風景が与える現在の心懷を詩の中に盛り込んだ。

筆巖書院の場合、松江鄭澈(1536-1593)は、筆巖書院に祭享された金麟厚(1510-1560)を回想し、懷河西という七言節句の詩を詠み彼の出处に対する節義を高く評価しており、清陰金尙憲(1570-1652)も七言節句を通じて金麟厚の節義と字、そして詩を高く評価している。

景観を詠んだ八景詩、十景詩などは、書院の空間に命名された意味と周辺風光の美しさ、そしてその中に内在した真の価値を詠んでいる。紹修書院の景濂亭と遯巖書院の養性堂題詠、養性堂十景などの作品がそれに当たれる。遯巖書院の養性堂十詠は周辺の秀でる山水の景観を十条の内容から構成し、詩に形象化したものである。こうした集景詩や連作詩の形で詠んだ題詠詩は、書院の特化された資料や文化コンテンツとして活用する必要がある。

■ 書院の古文書

各書院の運営過程で作成された書院の古文書は、書院の機能と役割を具体的に示す一次的な資料という点で意味が大きく、各書院は作成された古文書を厳格に管理してよく保存してきた。

現在、各書院に所蔵されている古文書を内容別に区分すると、創建と沿革、組織と経済運営、教育・祭享、郷村社会資料などと非常に多様である。創建過程など書院沿革に関する資料としては、書院の歴史を記した考往録類と創建過程・賜額・重建・追享または毀撤など書院の重要な事件を具体的に記述した史跡および日記類などがある。

書院の組織と運営資料

書院の組織と運営に関する資料としては、院長など書院の役員と院生の名簿である院任案・院生案、そして人的交流とその性格が把握できる祭享参加者と訪問者の記録である謁廟類と尋院録などがある。この代表的な資料として書院を動かせる実質的な主体であり構成員である院任と院生の名簿である紹修書院の任事録と入院録とがあげられる。紹修書院の任事録は、書院の創建時である1542年から1718年までの177年に再任された院長の名前が記された文書で、院長の氏名と字、在職期間と科挙の及第事項が記載されており、院

長の選出性格と時代別の推移が確認できる。入院録は、1543年から1672年までに年度別の入院生の氏名、居住地及び及第可否が記録されており、院生の性格と地域的分布と範囲とが見いだせる資料である。

書院の政治的・社会的影響力を確認できる資料としては書院の訪名録に該当する尋院録がある。玉山書院の尋院録は、創建時から20世紀初頭まで計103冊が伝える。そこには書院を尋ねた中央の高官のみならず、道内の代表的な士林たちの姓名と居住地、本貫などが記録されている。

書院経済に関する資料

書院の経済に関する資料としては田畝案、奴婢案、秋收記、身貢案、院属案、支出帳簿である用下記、書院所有の財産の受け渡し文書である傳掌記、都録など様々な文書がある。この資料は、書院経済を効果的に管理するために書かれたものである。

田畝案には書院の所有する畑と田(畚)の規模と位置、土地の確保方法および耕作者などが、奴婢案には書院奴婢の所有過程と名前、年齢、婚姻関係などが具体的に記録されている。身貢案は、奴婢が書院に出す経済的な負担の内容が細かく記されたものである。田畝と奴婢のほか、書院経済の一部を占める院属、属店、属寺及び寄付・扶助などに関する多くの記録もある。そして各々の書院には、院属の免役を官に訴える上書・所志及び官から発給された完文などが所蔵されている。

奴婢案の中で特に注目されるのは筆巖書院の奴婢譜である。この奴婢譜は1744年から1752年の間に作成されたもので、奴婢の名前と年齢、妻、夫とその身分が記載されている。非常に珍しく、資料的・学術的価値が高いため筆巖書院にある他の文書とともに宝物587号に指定されている。

一方、書院の経済力が総体的な規模で把握できる資料として傳掌記、都録などがある。この文書は、書院の輸入と支出状況を記録した一種の経理帳簿で、院長の交代時の受け渡しの手続きとして作成された資料である。陶山書院には建立の初期である16世紀から19世紀半ばまでの傳掌記が所蔵されており、玉山書院でも同様に都録、会計録など130冊余りが保管されている。書院には非定期的な寄付と扶助も行われたが、その代表的な例として紹修書院の膳録と雲院雑録、瀋溪書院の書院哀宝録などがある。雲院雑録は、紹修書院の設立初期に地方官の現物寄付が記録されたもので、初期書院の場合、地方官の扶助がかなりの割合を占めていたことが分れる。瀋溪書院の哀宝録は1555年から1559年までの記録で、その題名は書院運営のために書冊と財穀を集めるという意味である。寄付した人々の名簿及び金、稻、大豆、書籍、奴婢、魚物、塩、紙など様々な寄付の内容が確認できる。

教育と祭享に関する資料

教育に関する資料としては、居斎録、講会録と成績記録簿である講案紙及び入院生を選抜する薦案などがあり、祭享に関連するものとしては、勿記、祭需单子、祭享節目などがある。紹修書院の講所雑録は1826年から1828年までに設けられた講学の全過程を鮮やかに記録しておき、1795年の陶山書院の講会録には国王の正祖が陶山書院に御定朱書百選を下賜したことをきっかけに開設された講会の経過及び講長と講生の60名余りの名簿が収録されている。

また、書院の院生を選抜して教育を評価した資料として、玉山書院の薦案と講案紙がある。玉山書院の薦案は18世紀半ばから19世紀初頭までの資料で、春秋享祀と各種の集まりがあるたびに薦挙された院生の名簿と薦主が記されている。薦挙された院生の名簿の下には、考講と及第可否を表記し、1802年と1817年に実施された考講の成績の記録部である講紙には、試験科目ごとに成績を通・略・粗・不と記し、成績の下に採点者の署押が行われている。

地域知性史の活動に関する資料

書院が郷村社会内の政治・社会活動の中心地として機能した姿を証拠する様々な文書もある。それには官に請願する文書である所志類、官から書院の請願を確認し発行された文書である完文と立案、書院で議論し合意された事項を記録した立議・完議、書院の間の連絡文書である通文などがある。

所志類や完文などの殆んどは書院に所属された所属寺院、避役人、属店などに対する官の浸脱とそれと関わる免役・免税など書院経済と関連されたもので、特に通文の発行先は書院・郷校および各門中である。その内容は書院の建立と配享・追享の問題、文廟従祀運動、重建時の扶助、文集刊行時の扶助、孝烈に対する表彰などであり、19世紀半ば以降には士族の間に葛藤が深化され現れた様々な是非に関われたものが多く、それを通じて地域社会における書院の社会的活動の様相が窺える。

書院は、地方の士林の公論が収斂される窓口の役割を果たした。士林の公論は朝鮮中期以後の政治史の展開過程で絶対的な影響を及ぼしたが、書院を中心とした地方の士林は中央の政派と緊密に繋がれ、中央政界に重要な政治的事案があるたびに自派の政治的立場を裏付ける連名上疏(儒疏)を上げた。このような連名上訴が最大化されたのが万人疏で、陶山書院の‘思悼世子追尊万人疏’は、思悼世子を王として追尊させるのを請ったもので退溪の子孫である李彙乗を疏首とし10,094人の嶺南の士林が参加した。

■ 古書・冊板

韓国書院の図書館、出版機能

書院は朝鮮時代の教育機関として、その精神的価値と教育的機能に劣らず多くの古書と冊板を所蔵している知識の宝庫であった。書院の記録遺産で残された古書と冊板は、当時の書院管理や知的活動などが確認できる根拠資料となるもので、書冊の普及と閲覧が困難した時代に知識拡散と文化形成に大きく寄与したと評価される。

書院の古書は、講学と学問研究のために必ず備えるべきものとして収集されるか、自ら出版することからも備えられた。有名な書院の殆んどは比較的膨大な規模の蔵書を持ち、それを維持させ発展させるために多くの努力を払った。書院は、その設立の主な目的が学問研究にあり、そのための図書の収集、閲覧および保存の役割を果たしたので、このごろの大学図書館の機能を遂行したとも見られる。

特に書院の書籍出版は、地方官庁の監営とともに地方における出版文化の中心地として文化形成と知識普及に大きな役割を果たした。書院には刊行を担当する有司と刊所があり、主に教育用書籍をはじめ書院に祀られた人物の文集や遺稿などの出版が行われた。刊行された書冊は、他の書院や各々の門中に配布され、中央機構である弘文館と奎章閣などにも奉られた。

書院には、院生らの教育のために経書をはじめ歴史書、そして書院に祭享されている人物や彼の学脈をつなぐ人士たちの文集類など様々な資料が保存されている。また、現在に伝えられている書院の冊板は、書院出版の結果として残されたものであり、当時の知識の生産、普及、受容に関与していたすべての人々の人生の歷程が現代的に証言されている生き資料である。

書院の古書所蔵の過程

書院は初期には寄贈または購入する方法で書籍を用意し、その内容は主に性理学の基本書籍と中国の歴史書が多く、後期には個人文集の量が多い割合を占める。1541年(中宗36)、朝鮮において最初に建立され始めた紹修書院の場合、創設者である周世鵬が性理学関連書籍と中国歴史書を購入し、それに士林の寄贈した書籍を加えて書院の蔵書を備えた。各々の書院では、蔵書目録を作成し、閲覧のための規定を設けた。書冊の量が多い場合、書籍管理に関する事項を院規に明らかにし滅失と毀損を防いだり、書庫の管理規定を設けたりもした。

書院の書籍の収集方法は、国王から賜うことをはじめ、文人や他の書院からの寄贈または購入することに区分される。

国王の賜った内賜本：書院において国王が下賜する内賜本は特別な書冊でありながら、その書院の位相を表す証拠となるもので、非常に貴重に管理された。陶山書院の場合、初期に作成された書冊目録である書冊秩では、計182種の書籍を内賜、寄贈、購入などと区

分し記るしたが、内賜本の16種は殆んど性理学書である。内賜された書冊には内賜記が記され内賜印が押されている。国王から扁額を賜った賜額書院については、国王が書籍を下賜するのが慣例であった。政府が書籍を刊行し頒布する場合とか政府の蔵書に余裕がある場合には、別として書籍が下賜された。

文人と書院からの寄贈：書院の蔵書収集において寄贈は主要な収集経路の一つである。特に他の書院や地方の官庁または個人から寄贈された事例が多い。例えば陶山書院の書冊秩を見ると中央の機関と道觀察使、地方の受領などが多いが、そのうち官吏は殆んど在職中の赴任地から刊行された書冊を寄贈した。

書籍の購入と刊行：書院の書籍購入は、講学と性理学研究のための必須資料を備えることであった。書冊の目録には‘買得’、‘賃得’、‘賃置’など并表示し購入した書籍であることを表記した。既に刊行された書冊を購入することもあるが、冊板の所蔵先に紙を送らせ印刷させることもあった。書院では書籍の刊行も盛んに行われ、規模の大きい書院では木活字の所蔵もした。書院の刊行書籍は、その書院の特殊性と党色、学問的性向を反映している。

書院蔵書の利用と保存

書院には、印刷された書冊から残された古書のみならず、直接書いて製本した成冊類もある。記録と古文書の中で書院の所蔵した書籍の目録が収録された書冊秩や傳掌記の場合、書籍の種類と入手経路が詳細に表れる。そして書籍を利用する人々が閲覧して貸した記録もある。

各々の書院では、蔵書と冊板の管理のために目録を作成し、書院の規定(院規)にその流出を防ぐようにしたが、それにもかかわらず外部に流出されることがあったため、厳格な規定を作り官庁から公証を受けることもあった。書院では完文を作成し、責任者が書籍を必ず返してもらわねばならず、紛失されると他のものを求め置換えるように定めたり、書籍の保管された所の出入りを制限し、受け渡しを徹底するようにを規定したりもした。

書籍刊行のための冊板を管理した記録も多く残っている。各々の書院では、冊板の数量や作者などを表記し、その文書を官庁に上げ政府から書院にある冊板の現況が把握できるようにした。このような記録を見ると書院では、毎年何度も点検して冊板の現況を確認し、所蔵に格別注意を払ったことが分かる。

書院ごとに蔵書の収集と管理に力を入れ、その中で書院が設立される初期に収集されたものは特に貴重に扱えるべき文化遺産である。榮州にある紹修書院の場合、建立される過程で書籍を用意する内容が記録として残っているが、早い時期から書籍が収集され刊行されたことが分かる。1544年(中宗39)に作成された紹修書院の蔵書目録は、韓国で最も古い書院の蔵書目録である。安東の陶山書院は賜額されて以来、所蔵された蔵書はさらに増え、それを徹底的に管理し、今まで多くの資料が伝えられる。慶州の玉山書院に所蔵

されている蔵書もよく残られており、韓国の書院の蔵書研究に非常に重要な資料となっている。

書院別所蔵の古書と冊板

紹修書院は創設期から莫大な量の書籍を保有していたが、現在は多く失われ古書は30種145冊、冊板は竹溪志117枚など4種428枚が伝えられており、いずれも慶尚北道有形文化財第331号に指定され、紹修書院と紹修博物館に展示されている。瀝溪書院には、寒州先生文集など著名な学者たちの文集類、古書類が147件、祭享人である鄭汝昌と柳袞の文集として一蠹先生文集と介庵先生文集の冊板377件が所蔵されている。

玉山書院は陶山書院とともに現存する韓国の書院の中で最も多い古書と冊板があるが、約4,000冊に及ぶ膨大な古書と祭享人である晦斎李彦迪の文集の晦斎先生集を含めて計19種1,121枚の冊板が所蔵されている。陶山書院の古書と冊板は毀損と滅失が殆んどなくそのまま保存されたため、量的・質的に高い価値を持っている。その古書は1,026種4,605冊で、冊板は28種3,928枚である。退溪李滉の手沢本と易東書院の所蔵本及び陶山書堂の所蔵本など、壬辰倭乱(文禄の役)の前に刊行された書籍が相当部分残られている。陶山書院は国王から賜った内賜本が非常に多く、退溪の門徒と後学たちによって積極的に図書が収集された特徴を見せる。現在残られている書冊を見ると、朱子大全、朱子語類、性理大全などの性理書と論語、春秋、詩経など四書三経が内賜されたものと記されている。

筆巖書院には冊板が比較的多く残っているが、河西金麟厚の文集の初刊本の木板が1枚、重刊本の木板が258枚、三刊本の木板が391枚で計650枚である。そして1568年(先祖1)に刻まれた百聯抄解13板と遺墨4板、そして国王の仁宗が金麟厚に下賜した黙竹図板3板が伝われ、1610年(光海2)に刻まれた草書千字文18板、武夷九曲18板なども伝わる。道東書院にも古書10種26冊と冊板1種71板などが残られているが、古書は景賢録、御定奎章全韻、春秋左氏傳、五経百篇などの内賜本が主流をなす。冊板は景賢録1板が書院の蔵板閣に所蔵されている。

屏山書院の古書は1,071種3,039冊が調べられており、記録遺産の中で最も注目されるのは西厓柳成龍の著述で国宝に指定された懲毖録と宝物に指定された乱後雜録、辰巳録、軍門謄録などである。これは壬辰倭乱のとき領議政と都体察使などを歴任されていた柳成龍が戦乱の時に経験した事件と軍事政策などを収録しておいた資料で、非常に重要な歴史的価値を持っている。冊板はすべて25種1,907枚が保存されている。武城書院の古書は武城書院誌をはじめ8種が残られているが、その殆んどが19世紀末以降に刊行されたものである。遯巖書院も出版・印刷文化の伝統を見せるが、遯巖書院の冊板は計1,841板で、家礼集覽と喪礼備要などの礼書とともに、父子である金長生と金集の文集が相当部分を占める。遯巖書院の礼書出版は西人の礼学の中心的な役割を果たした処としての意味があるが、特に遯巖書院から出版された家礼集覽、喪礼備要、儀礼問解続など3種の礼書は、礼学書の刊行において書院の役割が把握できる端初となる。

韓国の書院は儒教の礼が具体的に実践され、儀礼化された処である。書院は教育の講学機能とともに祭享の儀礼を通じて先賢の学徳と行誼を敬った。

書院の院生たちは普段、講堂に集まって学問し、毎月一日や十五日など朔望に焚香する謁廟をし、春と秋の二度に祠堂で享祀を行った。士族たちはこれを通じて地方社会を教化させようとし、書院を先賢に対する祭享空間として機能させた。

祭享儀礼

■ 祭器、祭物、祭服

書院の祭享は周世鵬が白雲洞書院を初めて建て、祭礼のために祭式と笏記を定めてから始められた。周世鵬は郷校の釋奠と『家礼』などを参考に享祀笏記と陳設図を作成した。そして李滉も郷校の釋奠を参考として白雲洞書院の祭式を改正した。

『国朝五礼儀』では州縣にある郷校の釋奠での文廟の主享位と配享位の陳設は2簋2簋・8簋8豆・2牲で、配享位は1簋1簋・2簋2豆・1牲と定められている。これゆえに周世鵬と李滉は郷校の釋奠を参考として書院の陳設を2簋2簋・4簋4豆・1牲と整えた。書院の享祀には、紹修書院の事例によって2簋2簋・4簋4豆としたが、後代に供物を減らし1簋1簋・4簋4豆と改めた。

祭物は穀物と犠牲、そして幣帛が基本となる。穀物は銅で作られた簋と簋にもり、おかずの果、胞など乾いた供物は籩に、醢、菹など湿った供物は豆に入れる。書院では、ふつう豚のみを供えるが、一匹丸ごと供えたり、祭享者の主享位、配享位、従享位によってその部位を分けて供えることもある。

書院の享祀に着る服飾は3種類に分類される。献官および執礼、祝は官服を、執事は道袍を着るのと、祭官ともに道袍を着て献官のみ黒や藍など色を異にするのと、いずれも郷校の釋奠のように制服を着るのである。享祀には地域受領や政府から遣わせた官吏により享祀が行われた。ゆえに献官の場合、胸墳を縫い付けた團領に幘頭を被り笏を手で握まる官服を着た。官職がない場合は自分で準備した儒巾、緇布冠、黒笠(カッ¹)に道袍を着たが、献官だけ色を異にした。

■ 祭享の種類と手順

書院の祭享には、毎年春・秋に行う春秋享祀と毎月初日と満月に焚香する朔望礼、正月五日や六日に行う丁日礼がある。

1. 昔、馬のたてがみや尾の毛で作り、大人がかぶった冠。

書院の春秋享祀は毎年の旧暦2月と8月の中丁日に祀られたが、それが郷校の積奠の日と重なり、旧暦3月と9月の上丁日に行われるようになった。このような定期的な祭享以外に特別な場合に行われる非定期的な祭享儀礼もあった。非定期的祭享には位牌を臨時に他の場所へ移す時と、再び本来の場所へ移し祀るときに行う移安祭と還安祭、不時の災難にあったときに行う慰安祭、位牌を新たに奉安または除外させるときに行う礼成祭、額を賜ったときに行う賜額礼、政府からで祭官を遣わせ行う致祭などがあった。

定期的な享祀の手順は主に周世鵬の紹修書院の笏記に従うが、郷校の積奠祭を参照するかまたは朱子の滄洲精舎の積菜儀を参照とした。書院ごとに主享人や配享人、從享人またはその門下生たちの学規や祭享の解釈に応じて享祀笏記を制定しながら、書院ごとに異なる享祀の手順と行礼伝統が形成され現在まで受け継がれている。

それゆえに書院ごとに祭享の手順が少しずつ異なるが、春秋享祀は基本的に梵香礼、奠幣礼、三獻礼、飲福受胙礼、望僚礼からなる。

■ 享祀準備

書院の運営を担う役員たちは、通常旧暦2月や8月一日の朔望礼が終わると直ちに享祀準備の集いをとる。そこでこれからなる享礼を担う献官、大祝、執禮が撰ばれ、彼らに対する望記を作成して送る。

・ **祭物準備**：書院の庫直舎では享祀日を計算して事前に祭酒を仕込む。祭享の進行を委された有司と役員らは、2-3日前に予め供物を支度する。

・ **入斎**：有司と役員、予め撰ばれた三献官と大祝、そして執礼は享祀前日に書院の講堂に集まる。これを入斎と言うが、祭官として体と心を敬虔に注意する斎戒に入るという意味である。享祀の一日前には入斎したが、最近に祭享の時刻を夜明けから午前に移した書院が増え、有司と役員以外は祭享当日に入斎するところが増えている。

・ **省生礼**：省生礼は犠牲として用いる獣の状態を検査することで、鑑生礼または看品礼ともいう。

・ **執事分定**：執事分定は、予め撰ばれた三献官と大祝、そして執礼以外の役割を担う執事を選出する過程である。献官を中心として講堂に集まり時記録をもって執事分定を行い、祭享執事分定記に記す。そして分榜または唱榜といって分定された執事たちに各々の役割を知らせ、分定記を講堂の壁に掛けておく。

・ **写祝**：執事分定が終わると大祝は、講堂や祠堂に参り献官が見守る中で祝文を作成する。祝文の作成が終わると大祝は、初献官に祝文を確認させ、祝板や祝床に捧げ持ち祠堂の内の祭床の下、香卓の左側に置く。

・ **祭物謹封**：祭官は、供物と犠牲を祠堂に移し、典祀庁で各種祭器に予めお手入れした供物を盛る。祭器に盛られた供物や香、燭などは、その以後には手に触れないがように「謹封」と書き封じる。

・ **陳設**：位牌が祀られた神位の北を中心に左東に簠、右西に簋を置き、簠の左側に籩4器、簋の右側に豆4器を置いた後、簠・簋の前の中央に俎を置き、その前に爵と玷を置く。簠には稻米を、簋には黍米を盛る。籩には乾棗、鹿脯、栗黄、魚鱸など乾いた供物を、豆には魚醢、鹿醢、芹菹、菁根など湿った供物を、俎には牲を供える。

■ 享祀儀礼

最近には午前に祭享をとるところが多いが、もともとは夜明けの1時に享祀が行われた。享祀の半時間前まですべての祭官は衣冠を整える。執事や管理人はその時刻に祠堂の門を開き、祭床の左右に置かれた燭台に火を灯す。集礼が享礼の手順を書いた笏記を香使が朗読する。その唱笏に応じて祭官らは各々の任務を行う。

・ **就位**：すべての祭官が祠堂の前に進み拝位から再拝し各自の席へ行く。初憲官は先に陳設を点検し、大祝は位版の蓋を開ける開櫃をする。そして享祀を案内する集礼と賛人、謁者が先に拝位に進み、再拝をし自分の席へ行く。集礼の本格的な唱笏に応じて祭官は拝位に進み再拝をして各自の位置へ行き、三献官は祠堂に入り再拝する。

・ **焚香礼**：初献官が神を祀るために降神させる儀式で、神位の前で香を三回供える三上香の焚香礼を行う。

・ **奠幣礼**：初献官が祭物を奉る儀式で、神位の前に幣帛を供える。一部の書院では、奠幣礼を省略し、焚香礼の後直ちに初献礼を行うこともある。

・ **初献礼**：初献官が神位の前に初の爵を奉る儀式である。初献官は樽所に上がりお神酒を注ぐのを見守った後、祠堂に入り爵を受けて神位の前に供える。一部の書院では、茅沙器にお神酒を3回注ぐ祭酒をした後に爵を供える。

・ **読祝**：初献官が献爵をすると、大祝が初献官の左で東に向かって跪座し祝文を読む。殆どどの書院ではこの時、参祀者の全員が平伏す。

・ **亜献礼**：亜献官が神位の前に二番目の爵を奉る儀式で、読祝がないこと以外は初献礼の行礼と同じである。

書院の 記録文化と祭享儀礼

- ・ **終獻礼**：初献官が神位の前に三番目の爵を奉る儀式で、行礼は亞獻禮と同一である。
ただし、一部の書院では献爵の後、つまり終獻礼が終わると三献官と一緒に再
拝することもある。
- ・ **飲福受祚礼**：初献官が代表として神に福を受ける儀式で、初献官が飲福位に進み、西
に向かって神の歆饗したお神酒と俎肉を味わうことである。殆んどの書院
では飲福受祚礼の後に献官以下または献官のみ再拝する。
- ・ **徹籩豆**：享祀が終わって陳説された供物を下げるという意味で、籩と豆を少し移すことを
言う。捨身の意味で、大体の書院では徹籩豆のあとに献官以下が再拝する。
- ・ **望僚礼**：初献官が祝文を窪みに埋むか燃やすことを見守る儀式である。祝文を幣帛とと
もに埋むことで望瘞礼とも言うが、英祖代以後には埋めず燃やすため望僚礼と
いう。望僚礼が終わると享祀が終わったことを知らせる「礼畢」と言って献官以
下の人は祠堂を出、集礼以下の人は位牌の蓋を覆う「闔櫝」をして再拝する。

享祀が終わるとそれがうまく行われたかを確認する手続きとして祭公事または祭祀公論
が行われる。これが終わると講堂に集まり、郷約の約文を読む読約をするか飲福食事をす
る。そして、行事につかった供物を同じく配る意識として「奉送」を行い罷坐する。

書院祭享儀礼の意味

韓国の書院における祭享は儒教の礼が具体的に実践され儀礼化されたことである。書
院は、これら祭享の礼を通して先賢の学徳を崇め、礼を重要視する儒教の精神と文化を広
く拡散させ定着させる社会教育の役割を果たした。

書院の祭享の礼儀を通じて弟子や子孫は先賢の精神を繋ぎ止めている。こうした祭享
儀礼が続く限り、師匠の精神と書院の伝統はともに受け継がれるだろう。

- ▶ 榮州 紹修書院
- ▶ 咸陽 濫溪書院
- ▶ 慶州 玉山書院
- ▶ 安東 陶山書院
- ▶ 長城 筆巖書院
- ▶ 達城 道東書院
- ▶ 安東 屏山書院
- ▶ 井邑 武城書院
- ▶ 論山 遯巖書院

韓国初の書院

栄州 紹修書院

- 所在地：慶尚北道栄州市順興面内竹里158-2
- 創建年代：1543年(中宗38)
- 賜額年代：1549年(明宗4)
- 国家指定：史跡第55号



紹修書院は韓国で初めて設立された書院である。韓国書院の講学、祭享に関する規定を最初に提示し、以後建立される書院に影響を与え、これに関する文献資料も豊富である。紹修書院は教育機関として、書院が講学、祭享、交流と遊息などの機能を基本的に備えなければならないことを提示した。

主享人物：安珦(1243-1306)

慶尚北道榮州の紹修書院は、1543年に韓国で初めて中国の書院制度を受け入れ、建立された教育機関として、講学とともに独特の祭享儀礼を具現した事例である。紹修書院は、性理学を初めて韓国に導入した高麗後期の儒学者の安珦と書院制度を最初に収容した周世鵬を祀る書院であり、政府から初めて賜額（公認）を受けた書院でもある。

豊基郡守の周世鵬と書院創建

紹修書院は、韓国の最初の書院で、周世鵬（1495～1554）が豊基に建てた白雲洞書院が額を賜った時の名前である。豊基は中国で初めて朝鮮に朱子学を取り入れた文成公 安珦（1243-1306）の跡が残られたところである。豊基郡守として赴任した周世鵬は、こうした遺書ある処の荒廃した郷校を見て、それを重建したあとの1542年（中宗37）に文成公廟を建て始めその年8月に竣工し、晦軒安珦の影幀を奉安し、翌年には白雲洞書院を建立した。

紹修書院の創設者である周世鵬は地方官として教育、祭享などに関する運営規定を最初に定め地域の士林と共に設立を主導したのは、地方官として白鹿洞書院を運営した中国の朱熹の事例と類似している。

1543年（中宗38）9月、書院の規模がある程度揃われると周世鵬は、この地域出身の人物である安軸（1287-1348）と安輔（1302-1357）兄弟を配向した。

退溪李滉と紹修書院の賜額

創建されてから8年目となる1550年（明宗5）、白雲洞書院は政府から紹修書院と額を賜ることとなる。政府から紹修書院の賜額をまとめた人物は退溪李滉（1501-1570）である。彼は1548年（明宗3）11月に豊基郡守として赴任した後、書院に頻繁に立ち寄って弟子たちと一緒に主子学を講論し、享祀制度を改正して翠寒台を建てるなど、書院の整備に注力した。そして彼は嶺南監司の沈通源に手紙を送り、中国の宋の故事に拠って白雲洞書院に扁額を賜り、書籍及び土地と奴隷の支給を国王に要請してもらえることを請い、ついに1550年（明宗5）4月に朝鮮で初めて賜額を受けた紹修書院に発展させる。

初創期書院の建築と独特の空間配置

紹修書院は周辺景観の風致に優れている。書院は左側の松林と右側の丘の麓に流れる竹溪水の間のこじんまりした空間に位置している。

紹修書院は韓国初の書院という点で、書院の空間構成、すなわち建物の配置が整形化される以前の過渡期的姿を現している。祭享空間の文成公廟は明倫堂の左後面に配置されている。こうした空間構造や講堂にも別の堂号がつけず郷校の講堂である‘明倫堂’の名称にちなんでそのまま命名したのは、書院制度が整える前の初創期書院の独特な建築文化と空間配置をよく現している。書院の祭享空間で祠宇の文成公廟と典祀庁が書院領域の西側に位置して南向きし、講学空間で講堂である明輪堂は祭享空間の東にある。文成公廟は宝物第1402号、講堂の明倫堂は宝物第1403号に指定されている。

儒生らが寄宿する生活空間は、東・西齋として区別されず、明倫堂の後ろに一文字に位置しており、最も初期に建立された直方齋と以後、居接する儒生の増加で直方齋を側面に増築した日新齋および17世紀に建立された至楽齋がある。また、童蒙齋として使用したが、童蒙が講学する制度がなくなり堂号を変えた求学齋も後代の儒生の寮空間として使われた。その他付属空間として庫直舎、影幀閣などがある。

遊息空間としては、豊基郡守の周世鵬と李滉が建てた景濂亭と翠寒台、そして李垓が造った濯清池、また18世紀に建てられた霽月樓があった。霽月樓は、1720年の竹溪川側に10間規模と落成したが、現在は失われ記録に残っている。石刻の敬字岩もあるが、周世鵬が景濂亭の向かい側に性理学の概念の一つである‘敬’を石刻し、自然を鑑賞しながらも性理学的意味が悟れるように造成したとする。景濂亭から竹溪川を眺めると敬字岩とともに裏側の山が屏風のように囲まれており、外部の自然景観を効果的に鑑賞できる。

玄関書記、蔵書、古文書

紹修書院の懸板の中で建物と関連された扁額には、国王の明宗の御書を板刻させ賜った額の‘紹修書院’と‘白雲洞’、‘文成公廟’、‘日新齋’、‘直方齋’、‘求学齋’、‘至楽齋’、‘景濂亭’、‘鳳棲樓’、‘迎鳳樓’などがある。記文としては、‘白雲洞昭修書院記’、‘白雲洞安文成公祠堂記’、‘鳳棲樓重営記’、‘昭修書院童蒙齋重建記’、‘昭修廟宇重修記’があり、その他‘白雲書院榜’、‘学規’、‘白雲洞書院令’と‘文成公享祀執事’も保存されている。

一方、紹修書院には創建されてから発刊、収集された古書と書院の運営に関する資料が紹修書院資料展示館と紹修博物館に所蔵されている。主な資料として、古書は内賜本として『周易傳義大全』11冊、古活字本では『朱子大全』33冊があり、創建事実を収録した『竹溪誌』、創建直後から17世紀まで慶尚道内の各地のこおりから受発した公文書及び書院に対する財政支援と運営、講学現況を詳細に記録した『紹修書院謄録』と『雲院雜録』などの雜録類の記録がある。

『紹修書院謄録』と『雲院雜録』からは、書院教育に対する16世紀の地方官の財政支援と教育参加、そして科擧に備えた書院での学習の実態が確かめられる。また、『居斎録』と『居斎雜録』からは、科擧を中心にとった16～17世紀の書院教育が18世紀に至り、道学中心教育に変貌する過程及び教育内容と方法において、その変化の具体的な姿が確認できる。『講所雜録』からは、19世の紀紹修書院の講会で行われた討論と問答の内容、そして科擧の学習と道学の学習を調和的に運用するために苦軍奮闘した紹修書院の努力と実践などが調べられる。

また、書院所有の土地を収録した各種田畑文書、奴婢文書、蔵書目録、建物の重修に関する記録及び書院の運営関連受け渡し事項が記された傳掌記があり、16世紀以来の院任及び院生の名前を記録した任事録と入院録、書院訪問者の名前を記録した尋院録など数十種の書類が伝えられている。特に儀礼と関連された文書としては、韓国書院の笏記の中で最も古い周世鵬と李滉の直筆した笏記が現伝し、居斎録、通読雜録など17世紀から19世紀まで施行された紹修書院の講学記録も豊富に残っている。

祭祀儀礼と‘道東曲’

紹修書院には享礼の手順において他の書院とは異なる特徴があるが、初献、亜献、終献に奠爵するつどに道東曲という楽章を詠じながら行事する点である。道東曲は1541年（中宗31）に読んだ9章の景幾体歌¹で、竹溪に白雲洞書院を開き中国から道学が朝鮮に伝来され、広く伝播されたことを誉め称える内容である。礼と楽が調和をなす祭礼楽として、書院の享祀では紹修書院のみ詠じられる。道東曲を詠ずる儒生は、献官が変わるたびに長老を除き若い儒生3人に入れ替わり、実際の享祀で道東曲を詠ずる人は4人になる。現在、韓国では宗廟と文廟を除き、祭礼から礼と楽が調和する祭礼楽が詠じられる処は紹修書院が唯一である。

- 高麗時代の長歌の一形式。俗謡に対し学者たちの間で吟じられた詩歌で、漢文を多つかい、章の終おわりに‘景幾何如’という折おり返かえしを付付けた。



紹修書院 1550 (明宗5) 56.0X130.0



文成公廟 1605 (先祖38) 52.0X164.0



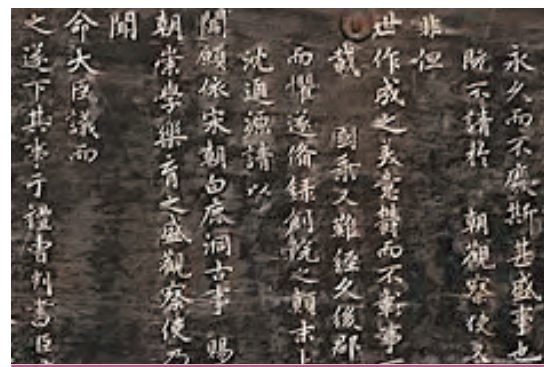
白雲洞 1610 (光海君2) 47.0X108.0



直方齋 1720 (宿種46) 46.0X120.0



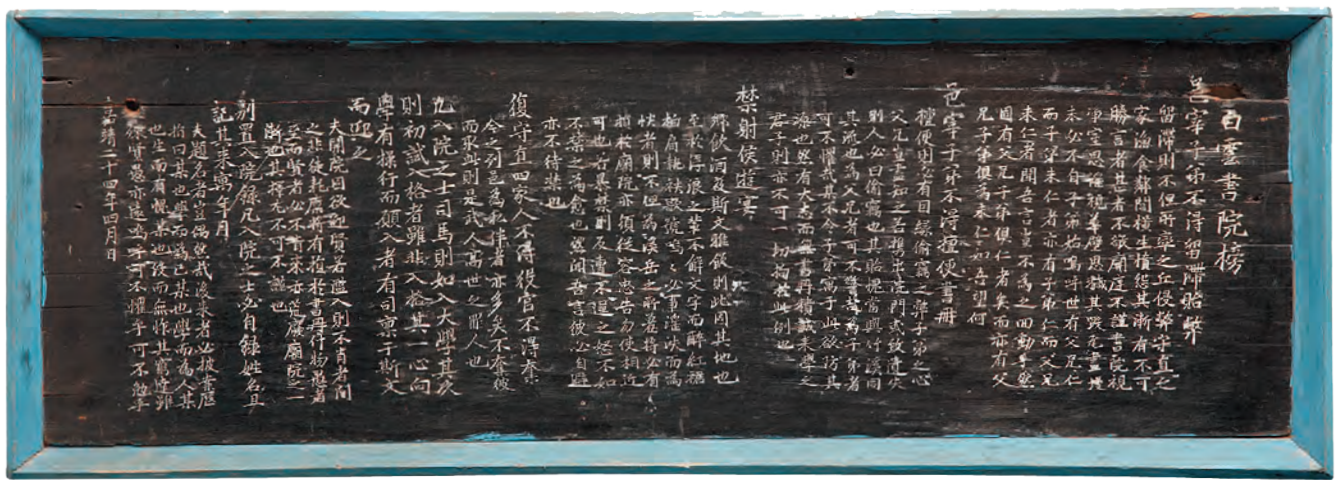
至樂齋 朝鮮後期 41.0X95.0



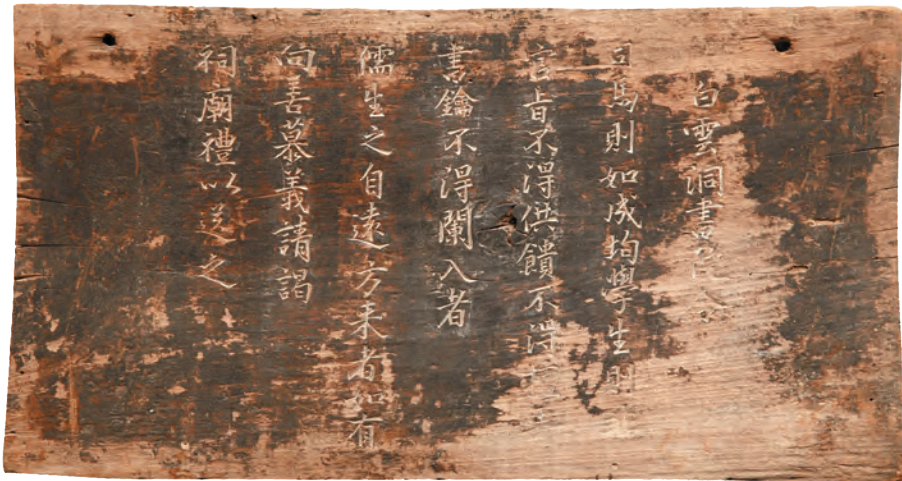
白雲洞紹修書院記 1550 58.0X253.0



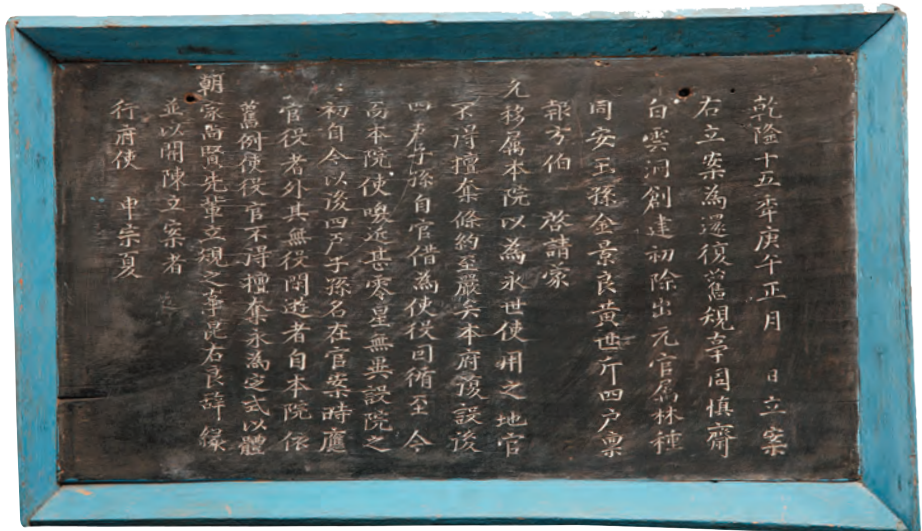
白雲洞安文成公祠堂記 1545 (仁宗元年/明宗即位年) 59.5X104.0



白雲書院榜 1545 (仁宗1) 45.5X146.0



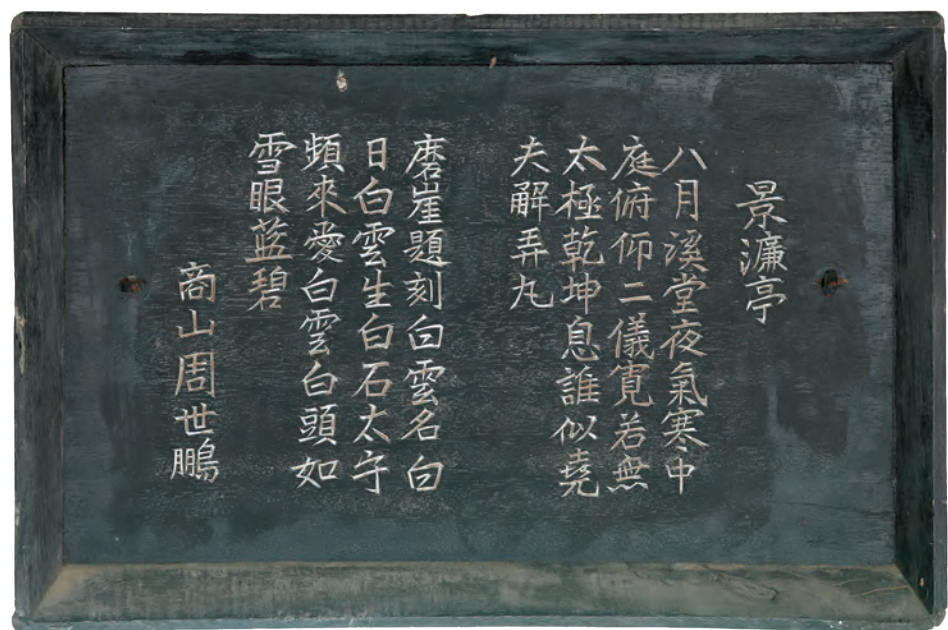
白雲洞書院令 1545 (仁宗元年/明宗即位年) 32.0X59.7



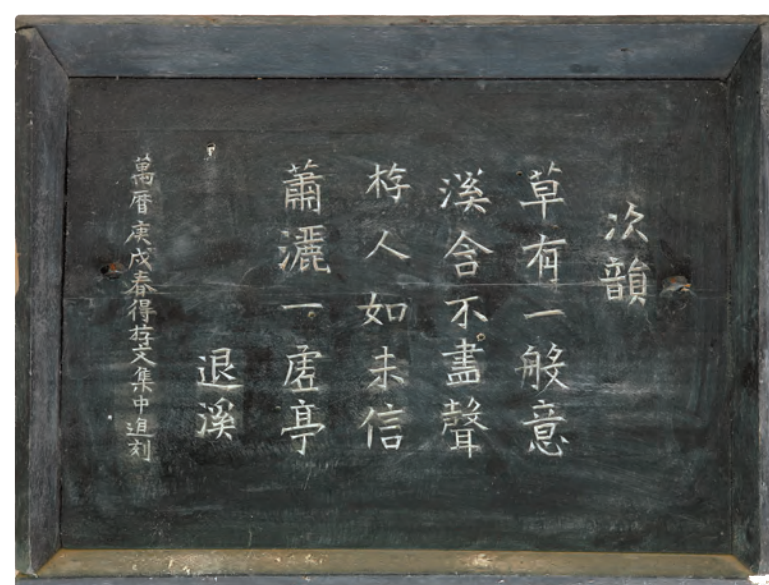
乾隆十五年立案 1750 (英祖26) 36.8X61.8



紹修廟宇重修記 1874 (高宗11) 48.0X98.4



景瀛亭 1545(仁宗1) 27.0X43.0

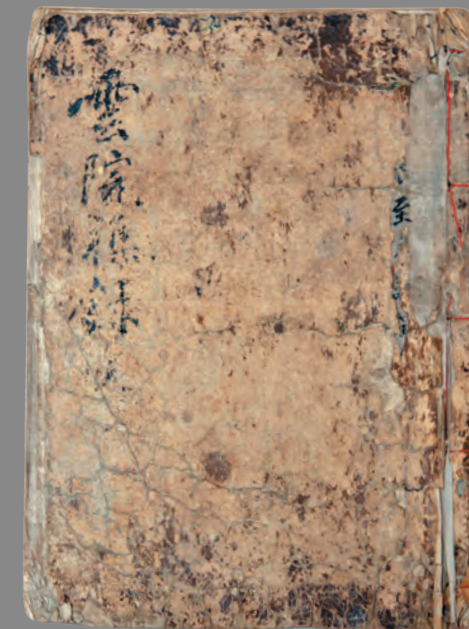


景瀛亭 1610(光海君2) 25.0X43.0





紹修書院入院錄 1543-1696 25.5X360.0



雲院雜錄 16-17世紀 22.0X30.0



院任事錄 1542-1718 39.6X25.4



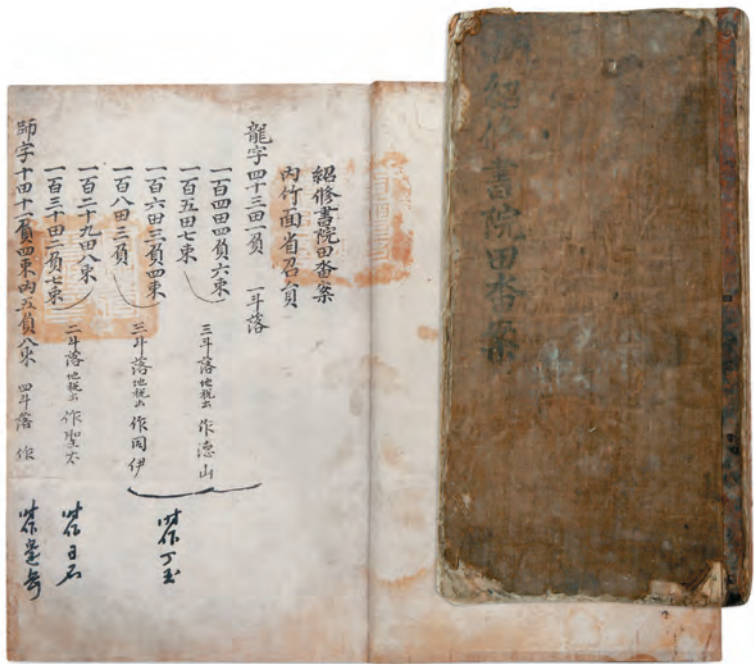
雜錄 1720-1759 29.0X23.51 / 1759-1832 33.4X22.22



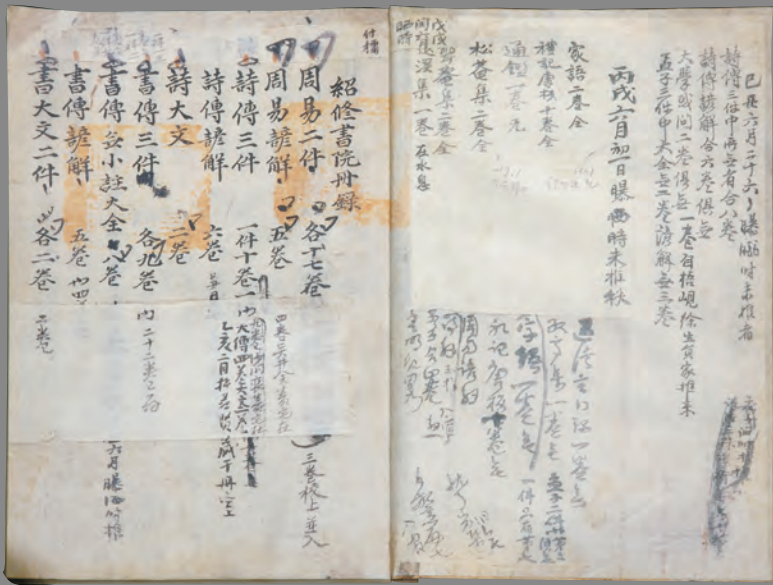
講所雜錄 1826-1828 28.0X18.0



紹修書院奴牌案 壬午年 33.0X22.0 29枚



紹修書院田畝案 1767(英祖43) 39.6X25.4



書院冊錄 己丑年 32.5X22.0



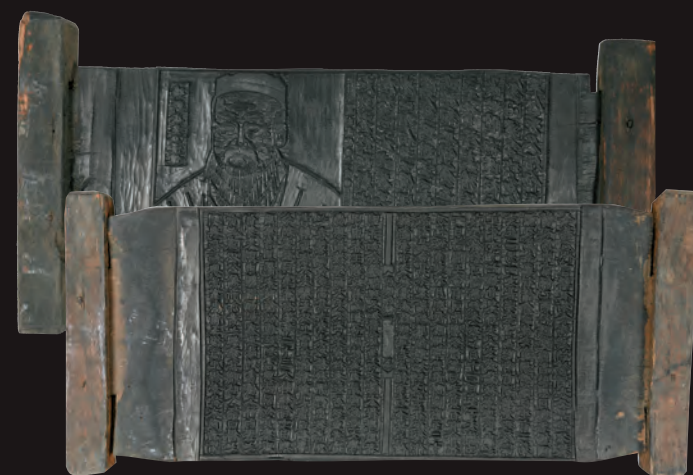
書院騰錄 1546-1670 45.0X37.5



竹溪志 1544(明宗9) 32.0X21.0



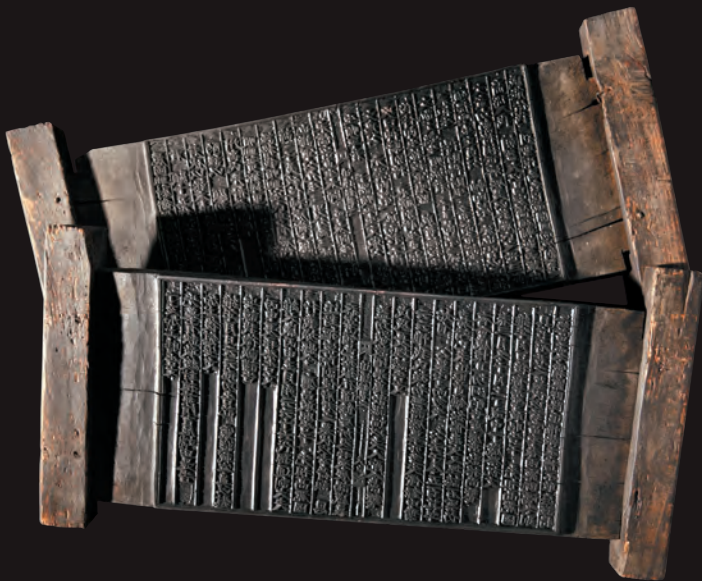
尋院錄 己酉年 47.0X29.0



竹溪志 冊板 19世紀 22.5X35.0



儷語編類 16世紀 27.0X17.7 1冊



追遠錄 冊板 1658(孝宗9) 20.0X36.5冊板 302枚



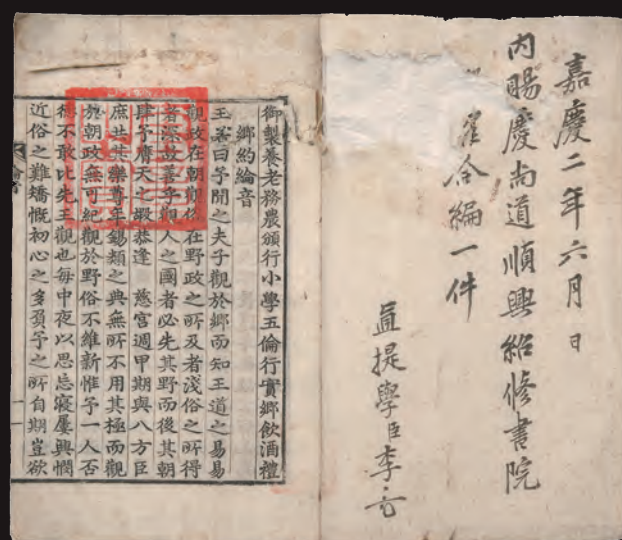
家礼彦解 1632 21.5X36.0 4板



六先生遺稿 冊板 未詳 32.5X29.5



武陵雜稿 1859(哲宗10) 29.5X19.3



鄉禮合編 1797(正祖21) 34.5X22.2



白磁 犧罇



白磁 象罇



白磁 豕罇

享祀の芳名録である時到録を作成



読祝



周慎齋先生手筆笏記



退溪先生親筆笏記



白雲洞書院の院規を詠む敬読



祠堂の中で祝文を作成



中門から入って
東門に出る献官



道東曲朗読



地域儒林の自発的建立と韓国書院の典型的な配置構成を持つ

咸陽 濫溪書院

- 所在地：慶尚南道咸陽郡水東面院坪里586-1
- 創建年代：1552年(明宗7)
- 賜額年代：1566年(明宗21)
- 国家指定：史跡第499号



濫溪書院は韓国で2番目に建てられた書院で、地域の士林によって設立された最初の事例である。建築的には、韓国書院建築の整形的な配置方式が初めて登場した事例で、それぞれの主要領域を区分して一つの軸線上に配置したのは、以後建立される書院配置方式の典範となった。

主享人物：鄭汝昌 (1450-1504)

瀟溪書院は一齋鄭汝昌(1450～1504)が祀られた書院で、韓国初の書院である紹修書院につぎ1552年(明宗7)に慶尚南道咸陽に建立された。瀟溪書院は、守令と監司とが主導した紹修書院とは異なり、咸陽士林の積極的な活動から建立された。建立以後、瀟溪書院は実践する儒学を強調した鄭汝昌の御意に従い学問を奨励し、郷村社会を導いた咸陽士林の拠点であった。

瀟溪書院の主享人物、鄭汝昌

瀟溪書院の主享人物は鄭汝昌(1450-1504)である。鄭汝昌は咸陽出身の士林で、16世紀前半に中央政界の官僚と進出した。金宗直から学問を学び、科擧に及第して成均館に滞在したが、母親の喪に遭った後、智異山の下にある蟾津の渡し場に隠居した。世子の師匠に任命され、後に国王となった燕山君を教えたこともあったが、1498年の戊午士禍の時、金宗直の弟子という理由で咸鏡道鍾城に流配された。彼は配所でも弟子たちを教え学問に専念したが、結局釈放されず54歳の年齢でこの世を去った。彼の遺体は、文人たちが咸陽に移させ瀟溪書院の後にある昇安山の麓に安葬し、1610年には文廟に従祀された。鄭汝昌は生涯実践する儒教を強調し、彼の学問は幅広く柔軟で、律令や法律制度など国家経営に必要な実務に関しても該博であった。鄭汝昌の政治活動は以後、士林の政治参加の一類型となった。

瀟溪書院の建立と賜額

瀟溪書院は紹修書院について1552年(明宗7)に建立された。創建を主導した人物は、咸陽出身であり南冥曹植の門道だった姜翼で、彼の主導のもとに咸陽の士林30人余りが意志を合わせて財穀と書冊を集め、咸陽郡守も講堂の建立を支援した。以後、工事が中断されたりもしたが、1561年(明宗16)ついに祠宇と講堂が完成され1564年には東・西齋と蓮塘(蓮池)を掘り書院の姿を整えた。

瀟溪書院は創建以後、咸陽および近隣の士林の会合の場となり、16世紀から居接、通読、講会など多様な講学活動が行われた。通読会は毎月一日と十五日、朔望焚香礼の後に定期的に施行され、非定期的には講会を開催して性理書を講論した。この時期、瀟溪書院の講学は、姜翼、曹植、吳健など南冥学派の核心文道が主導した。また、1565年の吳健が主導した講会には、曹植、姜公賀、姜文弼、姜翼、金宇宏、金宇顒、金宇容、盧禎、都希齡、朴思華、梁弘澤など当時、南冥学派の猛將らが出席し、朱子年譜と延平問答1巻を講論した。また、書院の教育と運営に使い残った財政があるときは、近隣の書堂を支援したり村人の喪葬礼に助力するなど、地域社会に積極的に貢献しながら徐々にこおりの中心機構として根を張る。そして1566年(明宗21)には書院の周辺に流れる川の名にちなんで‘瀟溪’と額を賜ることになる。

瀟溪書院は地方知識人である士林によって建立された最初の事例であり、書院の郷村教化的特徴を代表し、士林による教育、教化、地域の知性活動の定着過程を表せる。地域の郷村民に対する教化を担当し、特に朝鮮後期に入って崩れた民心収拾のための儒教倫理の普及に注力することで、書院の教化的特徴を代表する。また、公論を収束して郷村の義兵活動の拠点にもなった。

つまり、壬辰倭乱に国が危機にさらされると、瀟溪書院の院生たちは義兵を挙げそれを防いだ。しかし1597年、丁酉再乱(丁酉再亂)で日本軍が咸陽一帯を襲撃すると、書院は結局廃墟となり、国王から賜った書籍さえ散らばってしまった。当時、鄭汝昌の位牌は鄭慶雲が地の中に埋めておき、引揚げたあとには書院が再建されるまで小屋に奉安しておいた。1610年、鄭汝昌が文廟に従祀され、廃墟となった書院は紆余曲折の末、1612年に瀟溪の旧跡に再建された。

壬辰倭乱後の重修と追配

仁祖反正のあと瀝溪書院には1642年(人造20)に桐溪鄭蘊(1569-1641)と瀟溪俞好仁(1445-1494)が配享される。鄭蘊は咸陽出身で、曹植や鄭述など多数の師匠から学問を学んで科擧に及第し成均館で官職生活を始めたが、国王の光海君の御気色を被り済州に流配された。仁祖反正のあとに再び官職に進出し、丙子胡乱の時には斥和を主張して自決を試みたが失敗し郷里に戻って隠居した。彼らは性理学的実践と教育の観点から咸陽を代表する士林であり、瀝溪書院の初期運営を主導した人物である。

そして1689年には姜翼(1523-1567)が追配される。姜翼は瀝溪書院の建立と運営に専念し、1566年には嶺南儒生33人の疏頭になって鄭汝昌の身元復旧を請い、後学らに言葉より実践中心の学問を強調した人物である。

朝鮮書院建築の整形化

瀝溪書院は朝鮮時代の書院建築の配置形式を確立し、性理学的教育空間の模範を提示した。これは書院の立地や建物の配置、空間構成などによく現れている。最初の書院である紹修書院は、祠宇、講堂、斎舎の関係性が明瞭あきらかず建物の配置形式が明快に確立されなかった。しかし、紹修書院より約10年後に建てられた瀝溪書院は、多くの面で、紹修書院とは異なる初創期の書院建築の配置形式を確立させた。

瀝溪書院は蓮花山並の端の丘陵地に位置し、書院の前の瀝溪畑を眺める野景立地をとっている。また、書院の建物は、前底後高の傾斜地に合わせ前学後廟の遊息一講学一祭享空間を段階的に配置した最初の事例に該当する。講学空間は儒生たちが生活する東斎の養正斎と西斎の輔仁斎が庭を挟んで向かい合っており、前面に蓮池を造成し、東・西斎の床に愛蓮軒と詠梅軒を構え建物と遊息空間とを有機的に構成した。講堂である明成堂はその背後に位置させ前斎後堂の配置を採っている。

門樓で交流と遊息空間である風詠樓は18世紀に建立されたもので、楼閣の建立は後に建てられる書院で普遍化された楼閣建築物が事後的に適用されたことである。

瀝溪書院は他の書院と比べ建築空間の規模が小さい。しかし、書院を構成するすべての要素が完璧に揃えただけでなく、建物の配置形式までが始原的に提示された点は瀝溪書院の持つ建築的価値といえる。

蔵書と古文書

瀝溪書院の所蔵資料としては、『寒州先生文集』、『桐溪先生文集』、『松灘集』など学者らの文集類を含め古書類が147件、各種帳簿と通文、簡札などの古文書が717件、懸板を含む民俗・遺物資料が5件、『一蠹先生文集』と『介庵先生文集』の冊板が377件などがある。特に書院の組織・運営に関わった資料として、『瀝溪書院誌』をはじめ「経任案」、「院生録」、「哀宝録」そして、単回性の記録を総合した「尊衛録」などは、嶺南地域を中心とした朝鮮時代の主要人物がほとんど網羅されているため、朝鮮時代の社会史研究の重要な資料としてその価値が高く、書院の経済史的側面と教育史的側面でも重要な意味を持っている。

瀝溪書院の祭享儀礼を見ると、院会を通じて予めすべての祭官が選ばれるが、そこには院長をはじめ咸陽の儒林30人余りが集まる。三献官と他の祭官の選定が終わると直ちにかれらの望記を作成する。毎月一日と十五日に行う朔望礼の手続きも他の書院と異なる。まず、神位ごとに焚香し続いて行う俯伏礼や拜礼を各神位の前で行わず祠宇を出て中門の外で祭官一同が再拜する。



瀘溪書院 1566 40.0X160.0



明誠堂 16世紀 40.0X160.0



養正齋 16世紀 40.0X160.0



輔仁齋 16世紀 40.0X160.0



風詠樓 1841(憲宗7) 40.0X160.0

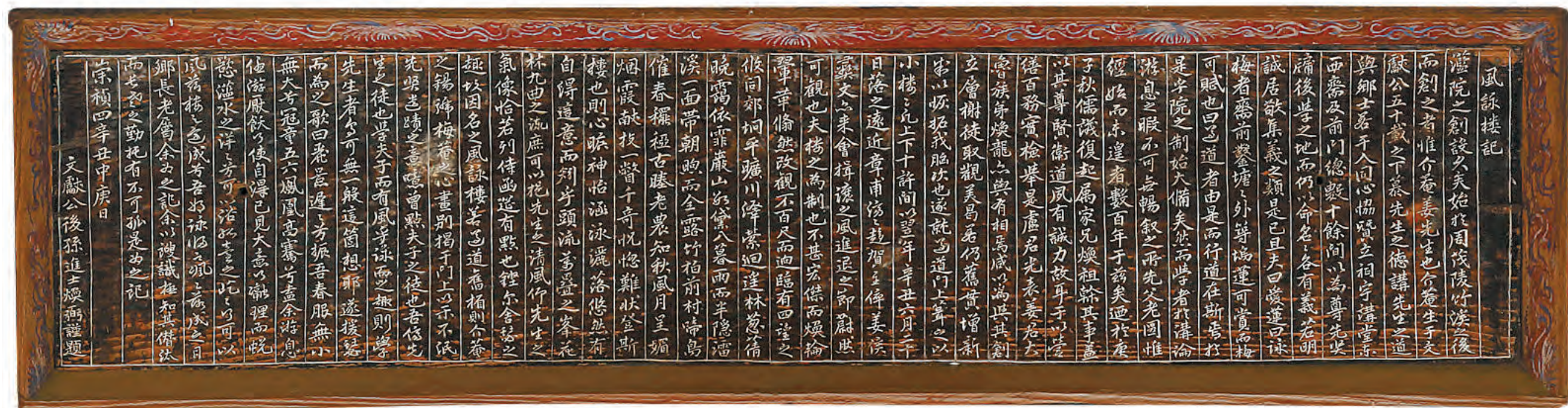


以友輔仁也齊之二新曰愛蓮而各有義而三額曰瀘溪書院在於吾東者周茂陵仲溪之後始興而三侯之誠意既極建緒朝宗扶世教而啓迪乎我民乎此題矣感三侯尚賢之誠慕夫子倡道之其道不徒學之而思所以盡其道夫子爲實剛毅之志而歲時於斯省之際而變化其氣質予以察情

瀘溪書院記 1566(明宗21) 40.0X160.0

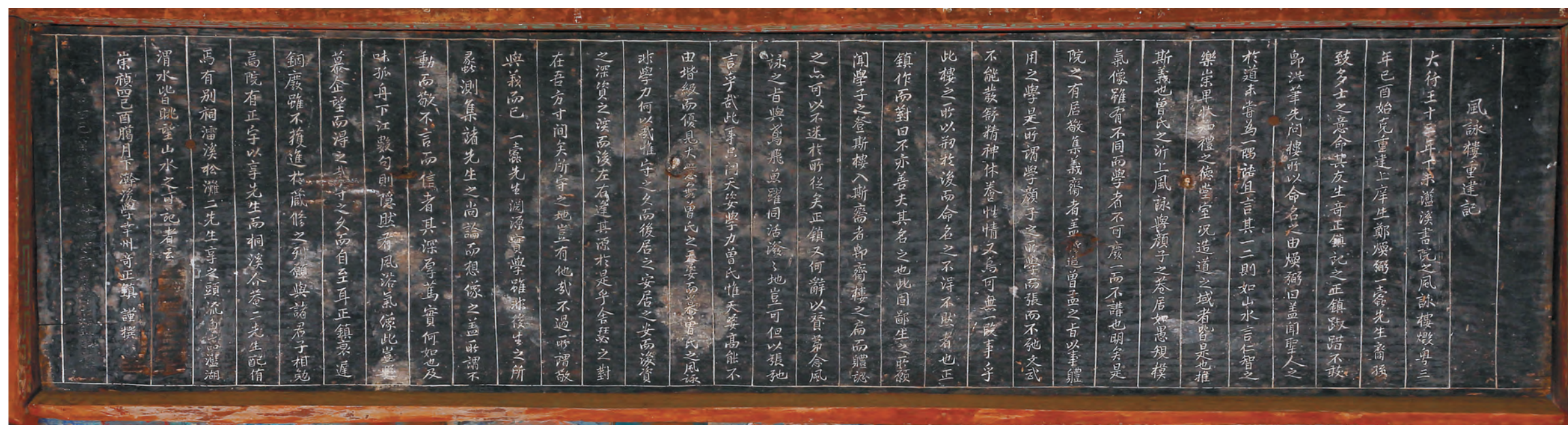


遵道門 16世紀 40.0X160.0



風詠樓記 1841(憲宗7) 39.5X154.0

風詠樓重建記 1849(憲宗15) 38.5X142.5





濫溪書院經任案 1552-1687 30.0X22.0(総8冊)



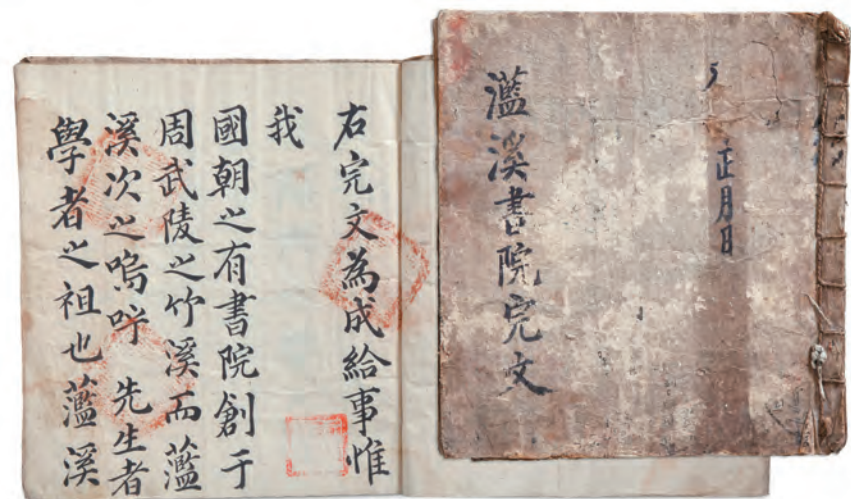
哀宝録 1552-1913 26.0X29.0(総3冊)



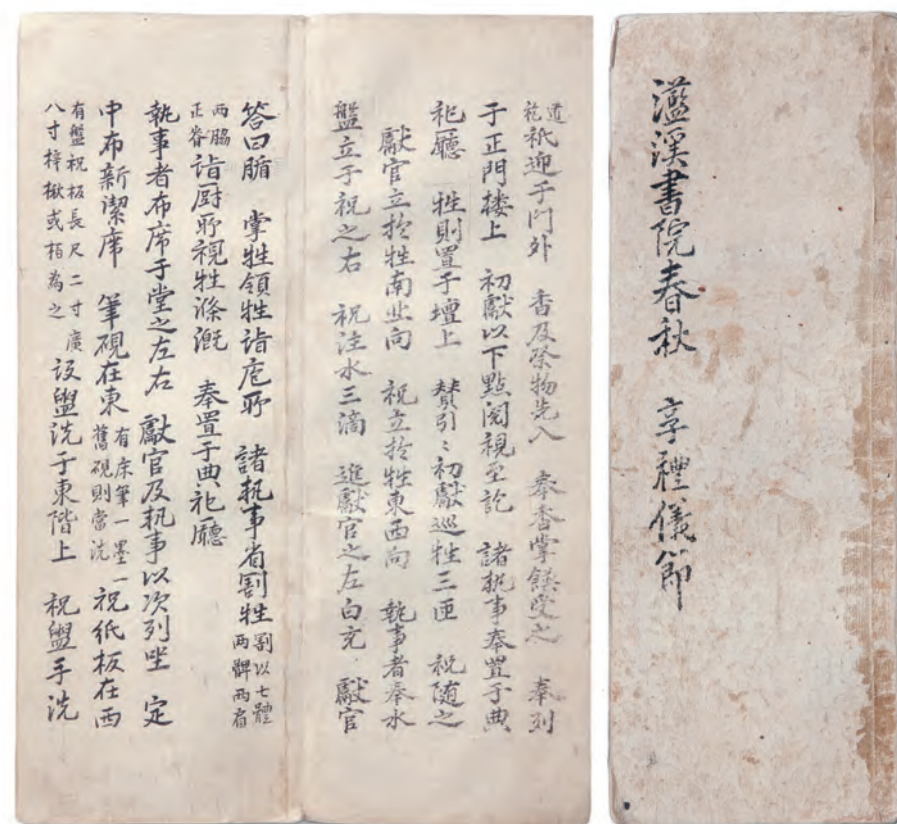
院録 1651-1671 35.0X25.0



溪書院田畝量案 1740(英祖16), 1780(正祖4) 49.0X30.0, 47.0X30.5(総2冊)



瀘溪書院完文 1843(憲宗9) 32.0X29.0



瀘溪書院春秋李禮儀節 未詳 40.0X14.0(總1冊)



一蠹先生文集 冊板 1635-1919, 未詳 24.0X37.0 冊板368枚



介庵先生文集 冊板 1686 21.0X36.0

犠牲の状態を調べる省生壇



祭官を選定する院会



主享位に犠生として捧げた豚の頭と前足



各神位ごとに幣帛を供え再拜する奠幣礼



神位前奠爵



生松の枝で犠生に水をかける省生礼



献爵前祭酒



両窓を閉める闔櫺



記録文化に関する出版活動の中心地であった

慶州 玉山書院

- 所在地：慶尚北道慶州市玉山書院ギル216-27
- 創建年代：1572年(先祖5)
- 賜額年代：1573年(先祖6)
- 国家指定：史跡第154号(1967.3.8)



玉山書院は出版と蔵書の中心機構としての書院の役割を確立し、建築的に書院領域の前に楼閣を導入して交流と遊息の機能を効果的に遂行した。玉山書院以降、書院に楼閣を設置することが一般化された。

主享人物：李彦迪(1491-1553)

玉山書院は朝鮮中期の道学者である晦齋李彦迪先生が祀られる書院で、1572年(先祖5)に慶州府尹の李斉閔と郷人たちが協力して創建し、1573年(先祖6)には「玉山」と額を賜った。建立以来440年以上に渡って慶州地域の学脈と教育伝統を継げ、嶺南を代表する書院に成長した。

朝鮮性理学の先駆者、李彦迪

玉山書院の祭享人物である晦齋李彦迪(1491～1553)は、宗廟と文廟に配享された官僚であり学者である。晦齋は韓国の性理学の発展段階で存在論・宇宙論などの性理学の理論を探求し、それについての討論を主導した。16世紀半ばに政界に進出し、性理学に基づく政治的見解を提示したり、王室の性理学教師として活動した。

李彦迪は1514年(中宗9)に大科¹に及第した後、弘文館・侍講院・成均館など文翰職と司憲府・司諫院など言官職を歴任し、1547年(明宗2)の「良才駢壁書事件」で平安道の江界へ流配されるまで文翰・言官職及び六曹・議政府などの堂上職を歴任した。

晦齋李彦迪は流配の期間中に活発な著述活動を通じて経世家のみならず程朱²の学説に従いながらも、自主的で独創的な様相を表した16世紀の代表的な哲学者として高い位置を占めている。李滉は晦齋の「行状」で「徳と行が一致しており明瞭した文章で著しその言葉が後世に垂示されたので、このような方を我が国から求めると彼方に匹敵できる人はいないだろう。³」と絶賛した。晦齋の学問は、李滉に多くの影響を与え、嶺南士林の性理学形成に先駆的な役割を果たした。その結果、金宏弼、鄭汝昌、趙光祖、李滉と共に東方五賢のお一方となり、朝鮮性理学の嫡統を受け継いだ人物として確定された。

天人合一の調和！書院建築

玉山書院は西側の紫玉山を眺めて西向きをなしている。北の華蓋山を主山にして、前に流れる紫溪川と周辺の鬱蒼とした樹木で秀でる景観をなしたところに位置している。書院は紫溪川の小高いところにある一枚岩の洗心台に面している。

玉山書院の空間は、無辺楼が中心となる遊息区域、講堂を中心とした講学区域、祠宇が中心となった祭享区域、付属建物の付帯施設などと区分される。建物は前方に講学空間を、後方に祭享空間を置いた典型的な前学後廟の配置を採っている。また、正門から祠宇までの一直線上に中心軸を置き、紫溪川から祠堂に至るまで節度あり、位階的に分節されている前底後高の建物配置をなしている。

祠宇の体仁廟、講堂の求人堂、講堂内の東西協室である両進齋と偕立齋、無辺楼、正門の亦楽門は領議政である盧守愼が命名し、懸板は当代の名筆である石峰韓濩が書いた。亦楽門は学問の楽しさを知る人々が出入りする門という意味であり、無辺楼はもともと納清楼と名付けたのを変えたもので、周敦頤の「風月無辺」に由来したもので、書院外の溪谷と山が一目に入れるようにしてその境界を取り除くところという意味である。堂号は李彦迪の著書『求仁録』から取ったものであり、両進と偕立は性理学の随一である明誠と敬義をもって教える者の心が表れている。

現在の講堂は1839年に火災で消失されたのを重建したもので、外部に掲げている賜額懸板の「玉山書院」という字は、再賜額された時に秋史金正喜が書いたものであり、内部のものは原本が消失されたため、領議政であった李山海の字を求め1839年に模写したものである。東・西齋の敏求齋と闇修齋は成均館大司成である許曄が命名し、懸板は承旨である裴大維が書いた。これは儒生たちが昔のことを好んで敏く求め学び、明らかにされない中で日々に新しく明るく学問を広げていく学問姿勢を強調している。体仁は仁で善良なことを実践に移すという言葉で、性理学でもっとも重要に認める部門である。それ以外にも、経閣をはじめ、庫直舎、庖舎、文集板閣、神道碑と碑閣などがある。経閣は御書閣とも呼ばれたが、政府から賜った内賜本と考往録、尋院録、院任録など書院の重要な典籍が保管されていた。文集板閣は1834年に淨惠寺が消失された後、寺院に保管されていた晦齋の文集や著書板木などを保管するために建てたものである。神道碑は寄大升が撰し、1577年(先祖10)に李山海が書き玉山書院の内に建立された。

玉山書院は建築的に交流と遊息施設としての楼閣を韓国のなかで最初に導入した。秀麗した自然景観をより効果的に鑑賞できる無辺楼がそれで楼閣を書院に初めて適用し、遊息空間の建築様式を整形化した。無辺楼は正面7間、側面2間の切妻屋根の建物で、講学空間と遊息空間を区分する進入門であり外部と内部の景観を結ぶ建物で、以後建立される書院の建築構成にも影響を及ぼした。

1. 科举で文科及第を殊勝に思って言うこと。
2. 中国の宋の儒学者である程顥・程頤兄弟と朱喜をいう。
3. 『晦齋集』、「晦齋李先生行狀(李滉)」、闊然日章而德符於行 炳然筆出而言垂于後者求之東方 殆鮮有其倫矣。

玉山書院の優秀な記録文化遺産

玉山書院は現伝する書院の中で多様な資料を最も多く所蔵しているだけでなく、その資料は質的にも優れており史料的な価値も非常に高い。その資料は古書、古文書(筆写原本類)、冊板などの記録文化遺産が代表的である。

3,000冊を超える古書は、1512年に刊行された『三国史記』(9冊50巻)が宝物第525号に指定され、『東国李相国全集』・『翻訳小学』など希少・貴重本も多い。一方、玉山書院では、『晦齋先生文集』、『求仁録』、『近思録』、『太極問辯』、『九経衍義』、『大学章句補遺』など、祭享人である李彦迪の文集と著書の冊板を独自製作し印刷したりもした。別の刊所を置いてこれらの冊板を製作させ修理させたが、淨惠寺が消失されるまでそこに木板が保管されていた。現在は計19種類の1,121板が伝わっている。

玉山書院には、書院運営と郷村社会の具体的な実状を示す筆写原本と古文書も1千余件が残られている。これらの古文書は、その内容によって大きく書院の人的構成と組織・運営体制、そして書院経済関係およびその他の日記・扶助冊などに区分できる。書院初期の経済的基盤といえる土地と奴婢に関する文書、書院の歴史、院長・有司など院任の名簿、書院を訪れた人事が自筆で署名した芳名録、収入・支出状況を記録した経理帳簿など書院経済と関連された資料が余すところなく伝わっており、これらは経済史的にも意義が大きい資料である。

代表的に玉山書院の建立当時から書院を訪問した人事が自筆署名した一種の芳名録である『尋院録』が110冊(『本郷尋院録』48冊は別途)ある。他にも、院(儒)生案、院属案、都録ど書院経済に関する資料も多く残られている。古文書の‘薦案’は、18世紀半ばから19世紀初頭の間のもので、入院儒生の名簿、入格、畢講の有無が記されており、‘講案’には具体的な教育評価が記載されている。加えて、‘立学記’、‘山堂居接時謄録’なども伝えられ実質的な書院の教育的機能が調べられる。

その他、各種の謄録・完議類は、玉山書院の運営上に問題があるたびに作成された公文書と規定をまとめたものである。代表的に『呈書謄録』と『謄録』がある。『呈書謄録』は、1589年から1683年までに作成された46件の上書を1730年(英祖6)にまとめたもので、そのほとんどが属寺である淨惠寺の僧侶の僧役、書院奴婢、書院田、書院所属船舶と塩盆、塩釜、格軍、漁師など書院の経済と関わったものとして免税、分給、免役などを請願する内容である。この資料は、玉山書院の初創期において経済的規模や財産の形成過程と運営が具体的に確かめられる点で史料的价值が高い。『謄録』は、18世紀後半に作成されたもので、玉山書院の財政運営に関するさまざまな事項について、以前の規定と新規に制定したものが併記されたものである。32条の規定は、院属の役割と身貢の量と期間、院任、書院建物の管理、書院の日常用品の收受などの具体的事項が明示されている。

その他にも、建物の重修と各種工事があるときは、その過程を日記として記録し、これと関連した扶助記・都録・下記なども必ず作成し、工事当時のさまざまな輸入と支出状況を記録した。焼失された求人堂を重建する1839年(憲宗5)には、『求人堂重建日記』・『講堂重建市郷中出物置簿』・『重修錢捧上記』・『香中錢入記』・『道内錢入記』・『重修錢冊』などの多様な記録物が作成された。

玉山書院は慶尚道の東部の書院と士林の公論を主導して発展していった。地域のさまざまな問題について玉山書院に集まり、多様な主題について論議した。玉山書院の士林は19世紀末、韓国の近代化過程のなかでも性理学の伝統を固守し、政府の一方的な近代化政策に反発し、地域の士林らが連名して上疏した万人疏を主導した。8,849人の士林が署名したこの資料は現在、玉山書院に所蔵されている。古文書の中で18世紀から20世紀までの嶺南における儒林社会の交流範囲と懸案が確かめる‘通文’も200点余りと非常に多い。



玉山書院 1574 (宣祖7) 83.0X240.0



體仁廟



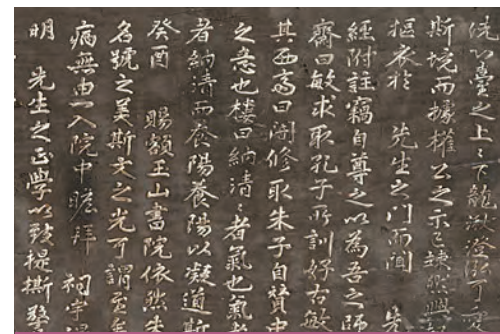
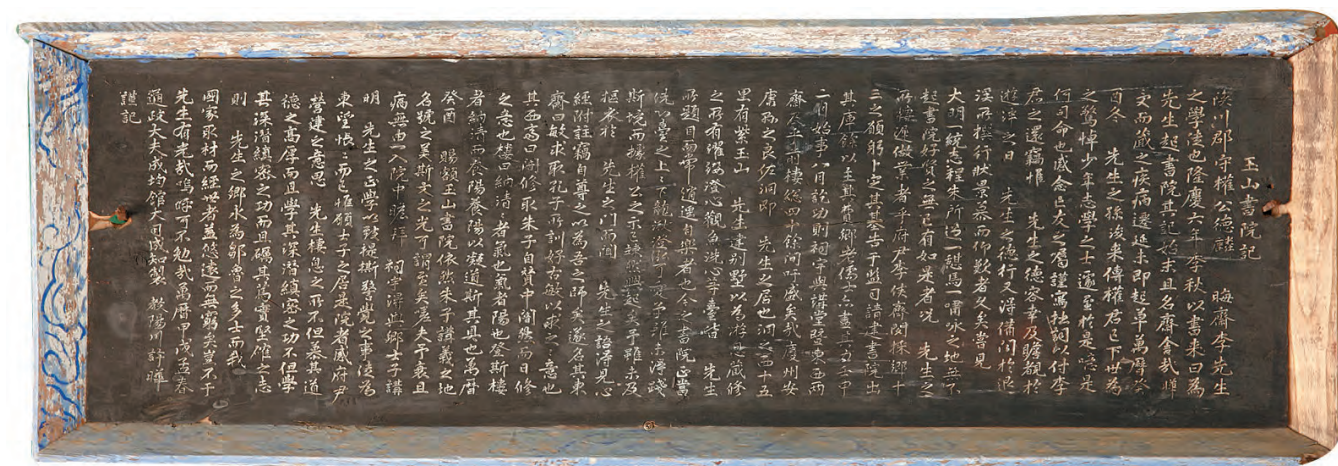
玉山書院 1839 (憲宗5) 79.0X180.0



求仁堂 16世紀 84.0X182.0



無邊樓 1572 (宣祖5) 62.0X114.0



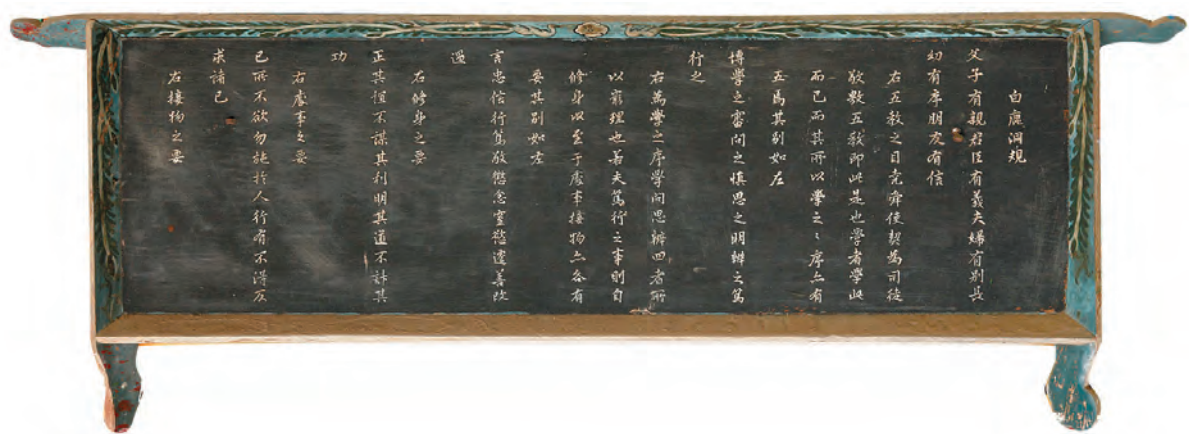
玉山書院記 1573 (宣祖6) 44.0X130.0



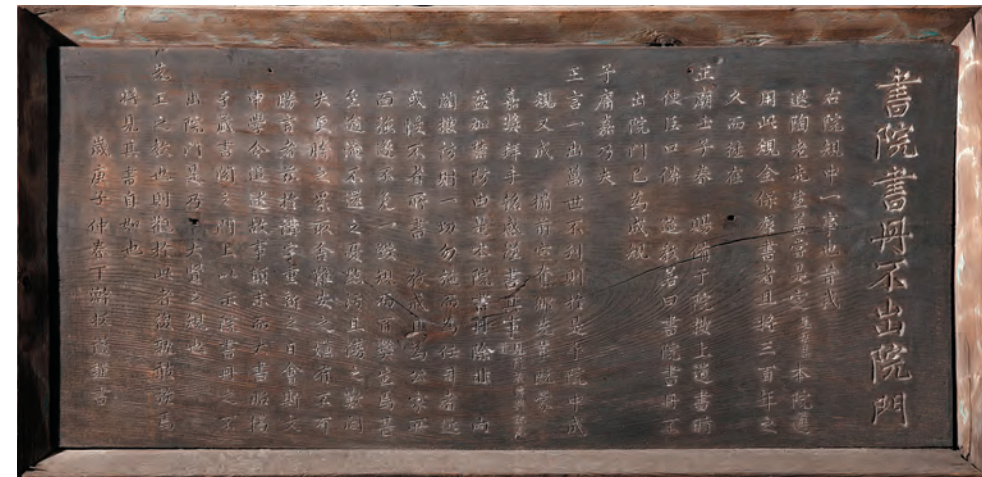
亦樂門 1572 (宣祖5) 49.0X129.0



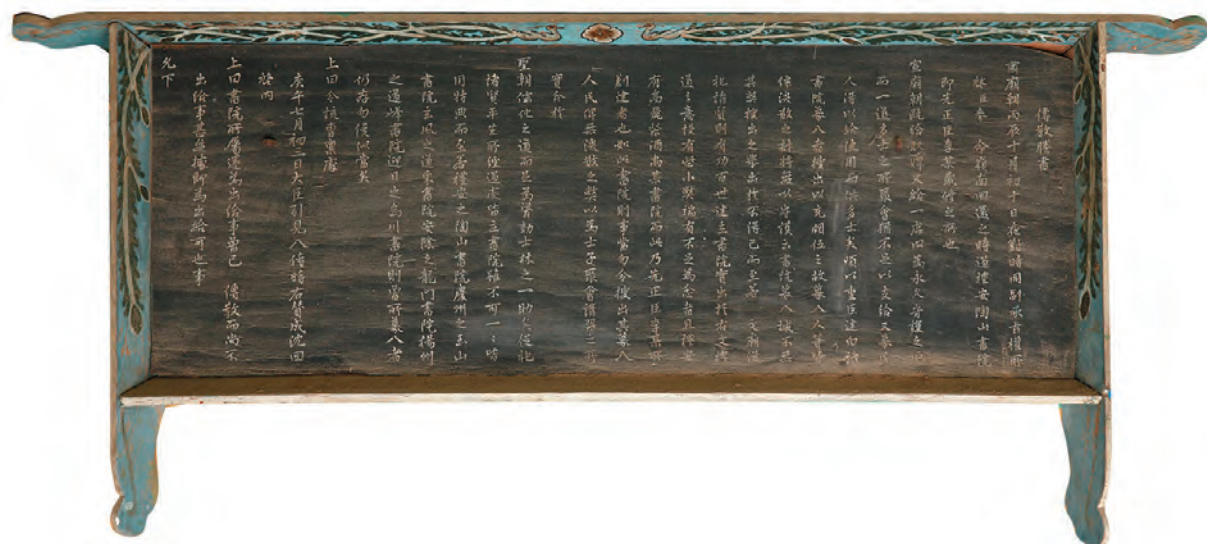
洗心台



白鹿洞規 未詳 62.0X150.5



書冊不出門外 庚子年 86.0X138.0



傳教騰書 19世紀初 62.0X158.0



玉山精舍記 1802 66.7X166.0



尋院錄天 1573-1582 33.3X22.5



呈書謄錄 1588-1683 22.2X28.0



萬曆六年玉山書院官奴婢案 1578 (宣祖11) 33.3X22.5



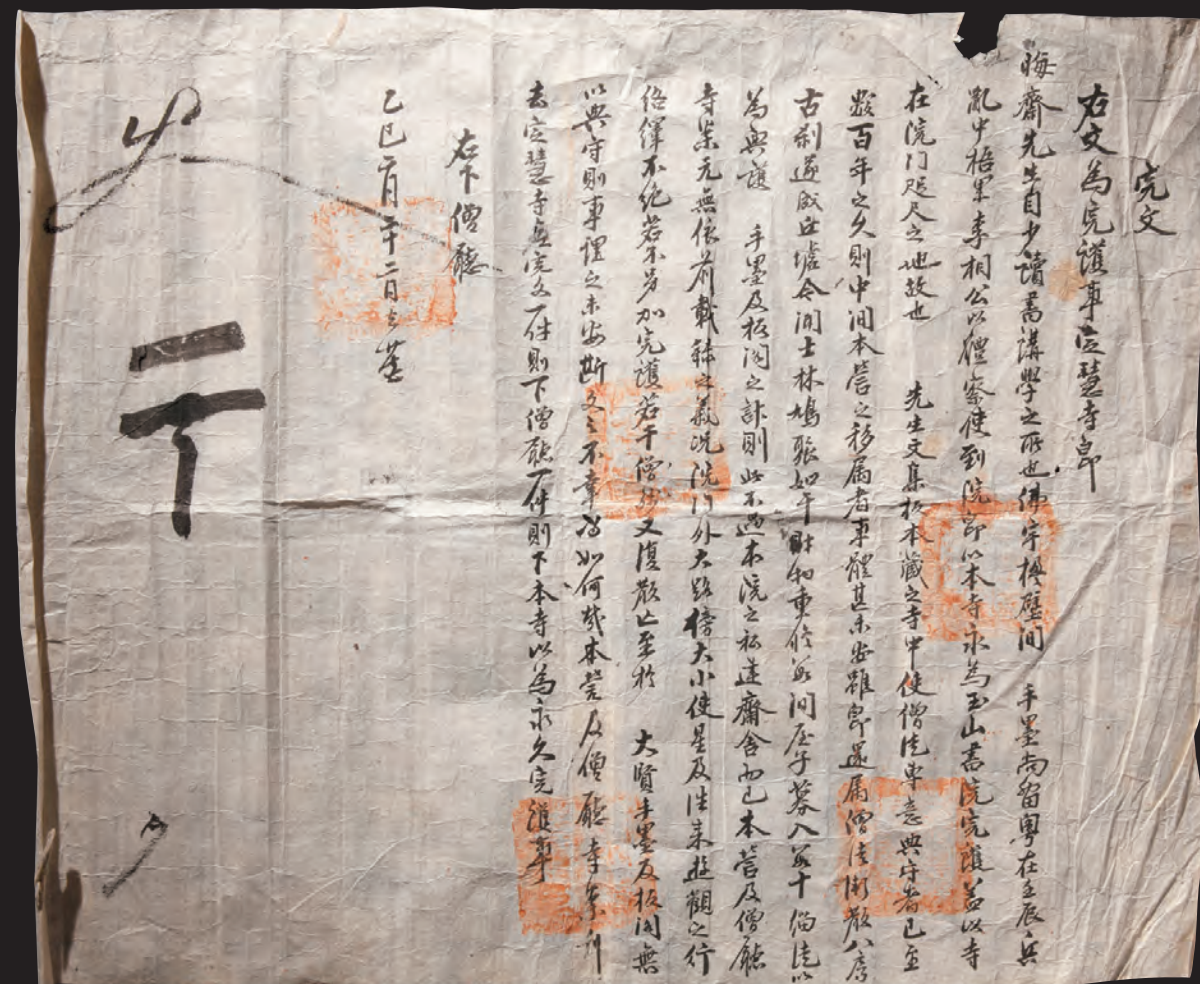
崇禎貳年己巳院奴婢案 1629 (仁祖7) 20.8X20.7



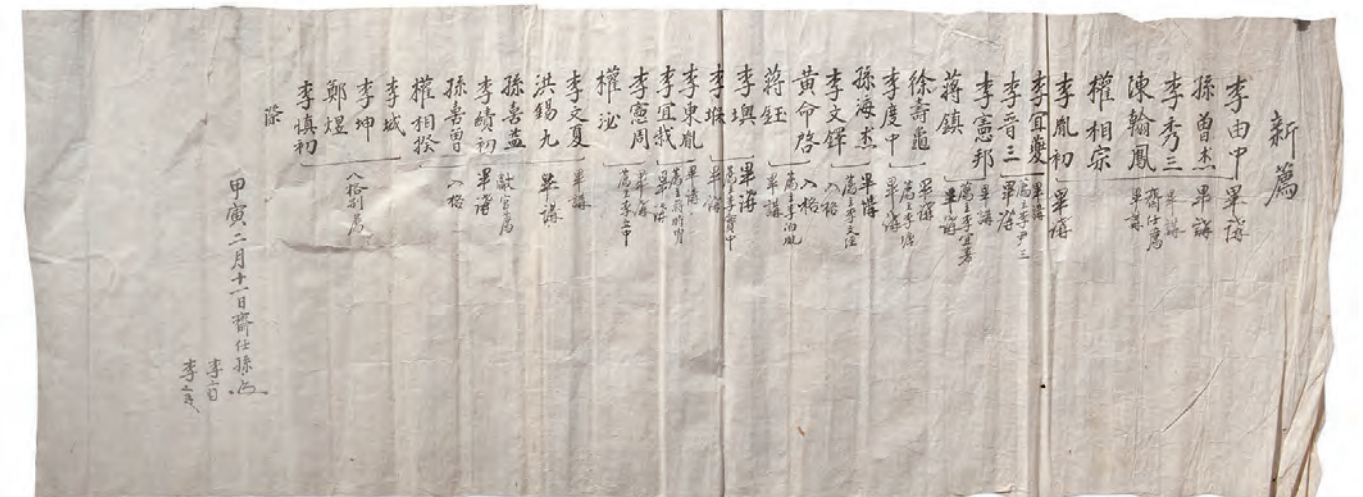
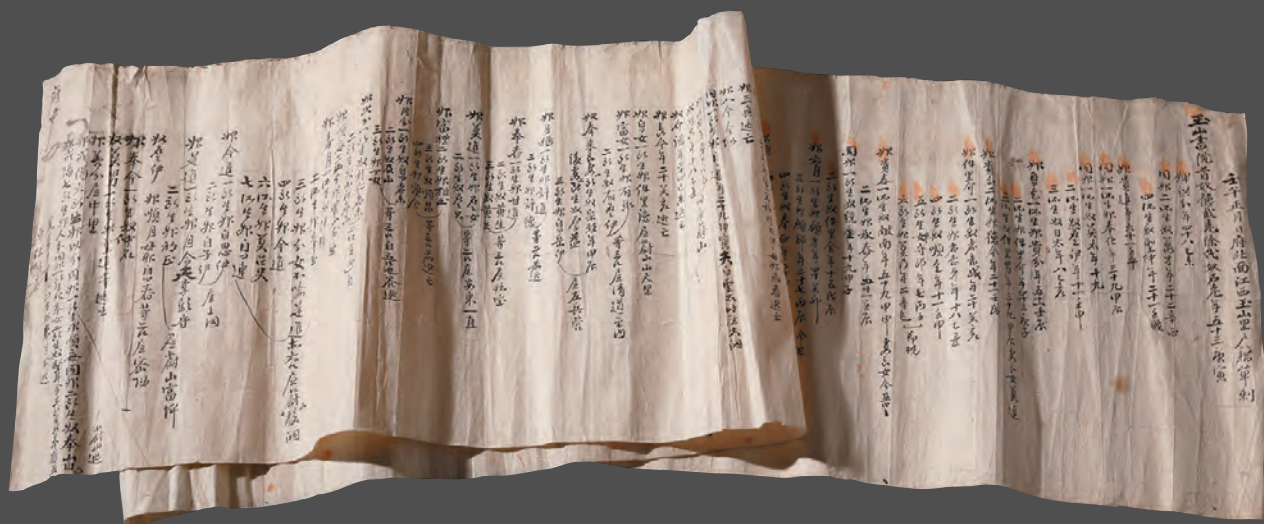
立學記 1649 36.0X26.6



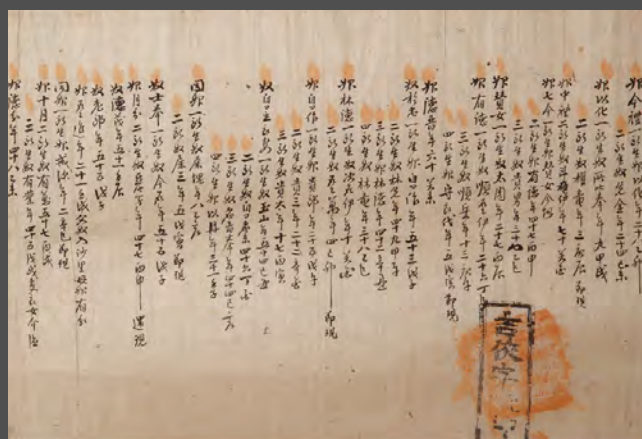
傳教謄書 1679 (肅宗5), 1690 (肅宗16) 38.5X30.0



完文 1785 (正祖9) 55.0X69.0



薦案新薦 1734 36.0X100.5



戶口单子 1762 (英祖38) 36.0X234.0



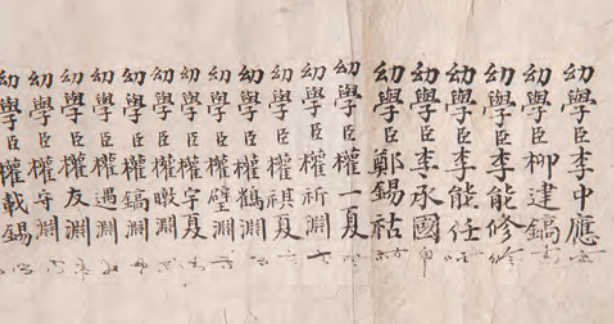
傳与記 1746 19.5X28.4



考往錄 1816-1873 35.4X37.0



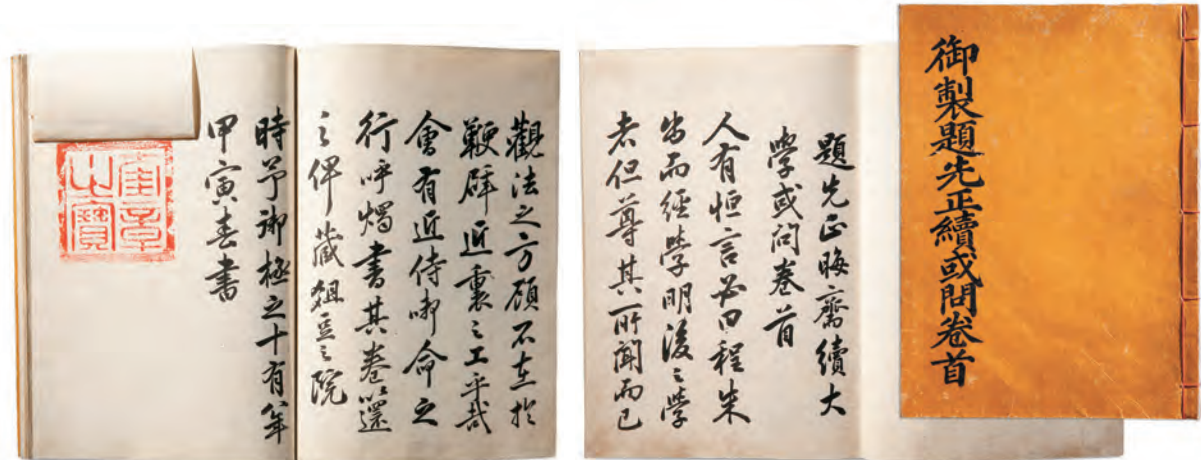
玉山書院講堂重建時鄉中出物置簿 1839 (憲宗5) 35.3X23.4



服制改革反对万人疏 1884 (高宗21) 02.0X10.036.0



求仁堂重建日記 1840(憲宗6) 36.0X26.6



續大學或問 1547-1553 32.5X23.6 (1冊)



三国史記 1512 (中宗7) 29.2X21.5 (50卷, 9冊)



東萊先生十七史詳節 16世紀中盤 28.0X18.0



翻譯小学 16世紀中盤 33.2X21.2



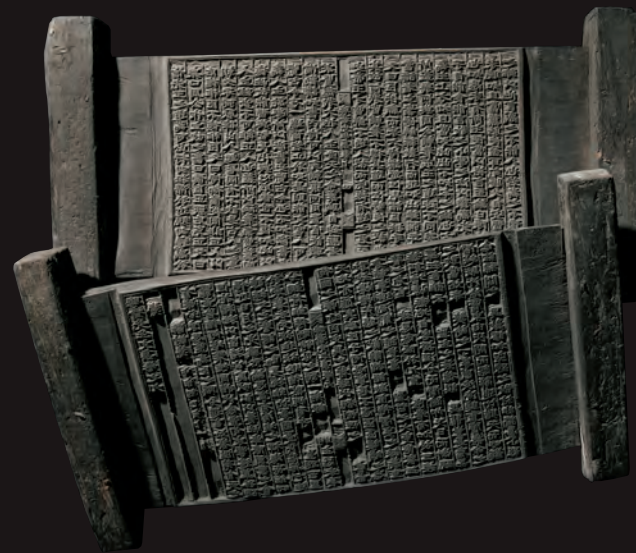
國朝儒先錄 1570(宣祖3) 33.2X21.3(4冊)



朱子大全 1575 (宣祖8) 34.2X21.8



裨雅 1538 (中宗33) 36.5X22.5 (5冊)



海齋先生集 冊板 17世紀 23.0X36.0

祭酒盛り



犠生の状態を調べる省牲礼



祭物盛り



撤籩豆



朔望礼焚香



初献監酌



飲福



祠堂の前で祝文を作成



幣帛を供える奠幣礼



学派中心の書院建立の代表的事例である

安東 陶山書院

- 所在地：慶尚北道安東市陶山洞陶山書院ギル154
- 創建年代：1574年(宣祖7)
- 賜額年代：1575年(宣祖8)
- 国家指定：史跡第170号



陶山書院は、書院が学問と学派の中心機構に発展する韓国書院における発展の過程を立証する。祭享人物の講学処に基づいて建立され、講堂が非対称で構成された特徴がある。卓越した自然景観のために一帯の景観を描いた様々な作品が残っている。

主享人物：李滉(1501-1570)

陶山書院は韓国を代表する儒学者である李滉を祀った書院で、李滉が学問しながら弟子たちを教えた陶山書堂を母体として1574年に建立された。

陶山書院は韓国の他の書院では見られない書堂と書院が併存する特性がある。陶山書院は創建以後、持続的な講学を通じて退溪性理学と心学を忠実に受け継ぎ、退溪事後に書院として発展し繁盛した韓国の代表書院の一つである。陶山書院は韓国書院の中で学問及び学派の形成、伝承の典型を成した代表的書院として、朝鮮後期まで退溪学統を継承発展させ、綺羅星のような人物を排出した。また、性理学に関する典籍と木板を最も多く保有しており、講会録など教育と関わった古文書資料も多数保存されている代表的な書院である。

退溪李滉と陶山書院

陶山書院は、師匠の講学した処をもとに書堂から書院に発展した朝鮮書院の典型的な発展経路の一つを現わす代表的な事例である。陶山書院は全面に洛東江が流れる傾斜地に立地し、自然親和的景観を具現した韓国書院の典型を見せている。祭享人物である李滉の講学処であった陶山書堂が母体となり、李滉の死後に書院として建立された。この書院は性理学的空間として書院建築の装飾の簡素化が実現され独自に完成された事例である。

退溪李滉(1501~1570)は、中国から伝来された性理学を朝鮮に定着させ、体系化させるのに決定的な貢献をした人物である。李滉は16世紀半ばの朝鮮における性理学の知性界を主導し、当代の士林の大師匠として朝野の尊敬を一身に受けた。彼の性理学研究を基点に朝鮮の性理学が理論的・体系的に発展するようになった。李滉の性理学研究および著述は朝鮮の多くの士林の指針書となり、17世紀には日本にも伝来され日本の性理学研究に影響を与えた。李滉の主導で16世紀後半の書院建立が活発に展開され、それによって書院の教育及び祭享儀礼に関する事項が整理された。朝鮮の性理学の定着と書院の普及において李滉は、最も象徴的な人物である。

特に退溪は50代以後、朝廷に仕える心を折り、後学たちに対する教育に本格的な関心を傾け、50歳には寒棲庵を、51歳には溪上書堂を建て、以後に門生たちが増えるについに57歳になった1557年には礼安に陶山書堂を建立し、彼の独特な教育と読書法をもとに弟子たちを教えた。

1570年に退溪が世を去ると弟子たちは、師匠の学説を受け継ぎ発展させるために、退溪が一生を過ごし著述と教育活動をしていた陶山書堂の後ろに祀廟を建て書院を建立する。そして次の年である1575年(宣祖8)には、陶山書院としてが額を賜った。

そして40年後の1615年には、月川趙穆(1524~1606)が従享された。彼は退溪の弟子として篤実な学問姿勢をもとに師匠の学説を受け継ぎ、退溪の死後には退溪集の刊行と陶山書院の建立にも主導的に参加し、晩年には士林の徳望の高い元老と称賛された人物である。

陶山書院の景観と空間構成

陶山書院は、前方に川を見渡す景観が備えられた場所に建てられ、書院領域の前半部に楼閣ではなく川辺が眺められる台を造り景観を展望する方式をとった。陶山書院は四方の山峰と溪谷が手をつないでおじぎをしながら囲みかかえるような形勢をなしたところにある。退溪は、こうした山勢、水勢、野勢がふさわしい所を選び陶山書堂を建て、その後再び陶山書院が建ち入るようになった。

陶山書院の空間構成は大きく、陶山書堂と陶山書院の二つの領域に分けられる。陶山書堂は初期の書堂の原型がそのまま保存された良い事例で、退溪の死後にもその原型が維持されたことで、陶山書堂の造営を通じて建築と自然の合一を図った退溪の建築観は以後、陶山書院の建築にもそのまま受け継がれた。陶山書堂は学舎の書堂と寮の隴雲精舎からなるが、それらは退溪李滉が晩年に性理学研究と弟子養成のために建立した建物である。陶山書堂は1560年に、隴雲精舎は1561年に建立された。陶山書堂は西側の小部屋がついた台所、中央の玩楽斎、東側の巖栖軒の三つの部分からなる。玩楽斎は李滉が読書し居住した部屋であり、巖栖軒は弟子たちと共に講学活動をした大庁(床)の空間である。隴雲精舎は弟子たちが宿り学習したところで、休憩空間である観瀾軒、学生が勉強する時習斎、寮の止宿寮などがある。

陶山書院の祭享空間と講学空間は、朱熹が著した家礼書である『朱子礼書』をもとに企画されたもので、祀宇の尚徳祠、御供を準備する典祀庁、講堂の典教堂、東・西斎の博約斎と弘毅斎、書冊を保管する東・西光明室、木板を保管した蔵板閣などがある。

講学空間では、祀宇の尚徳祠がどの位置からも見上げるも正面からは見られずにするこで、祭享空間が持つ神聖性と位階が整えるように計画した。対称的な設定は、李滉が建立を主導した書院に共通して観れ、屏山書院をはじめ、以後に陶山書院の近くに建てられる書院建築の配置にも影響を及ぼした。

陶山書院の交流や遊息空間には楼閣が存在しない代わりに天淵台と天光雲影台があり、そこから外部景観が眺められる。書院を支援する施設である庫直舎は2棟があり、川の向こう側には18世紀の陶山書院で行われた科挙試験を記念するため築いた試士壇が残っている。

陶山書院の教育活動

退溪の門人たちは陶山書院を建立した後、退溪の教育哲学を忠実に継承しようと努力した。以後、陶山書院は講学と享祀を通じて退溪門人としての結束を固め、朝鮮後期には講会を通じて退溪心学と性理学を継承することで、嶺南の学風を代表する首院であり退溪学脈の拠点として位置づけられるようになった。そして中央と地方を問わず嶺南を訪れた朝鮮の官吏と士人らの、退溪を慕い陶山書院に向かう行き来が絶えなかった。

陶山書院の教育は、居接・講会など集団的な学術活動の方式から行われた。16世紀末には居接、18～19世紀には屢次の講会の記録が確かめられる。その中で講会は、今日の集団シンポジウムあるいは大規模なセミナーにあたる学習方法として注目に値する。18世紀には心学を学習するための心経講会や正祖の蕩平政局構想に関連する政治的性格の講会が、19世紀には退溪学団の結束を固め、当時の学問的争点について統一された意見を収束するための哲学的性格の講会が開設されるなど、様々な契機により講会を通じた教育活動を続けていった。門人たちは、陶山書堂と陶山書院の教育活動を通じて退溪の学問を忠実に継承することで、以後の退溪学は徐々に分化し発展され朝鮮性理学の独自の学問体系として確立された。

特に陶山書院は、嶺南の士林文化の代表的交流先で創作先であった。陶山書院を訪れた多くの人物は、陶山書院を主題とした多くの詩文を残した。陶山書院を取り囲んだ周辺景観を主題にした詩文が3,000余り以上も現存し、その中でも李滉が詠んだ陶山雑詠がその代表的作品である。また、陶山書院は自然景観の卓越性から朝鮮時代の画家たちの作品テーマにの選ばれたが、鄭歆と姜世晃の陶山書院図はその代表的な作品である。

朝鮮後期の致祭きと陶山別試

陶山書院が嶺南を越えて全国一の書院として浮上したのは18世紀以降、政府の優待がきっかけとなった。英祖と正祖は、党争を収拾させ政局を安定させる蕩平策の一環として、長い間政界から疎外された嶺南人の不満を収拾するために、嶺南士林が絶対に敬う退溪に対する政府の礼遇を恵んだ。英祖と正祖の時、陶山書院に各々2回ずつ致祭が行われたのはそのためであった。国王が下げる祭祀である致祭は、その儒賢としての位相に対する国家的公認の意味をもって、その門道と学派の正統性と権威が裏付けられる決定的な要素であった。特に正祖が李滉の学問的業績を記念するために致祭を行え、陶山書院で科挙を設行させ、それに7,000人余りが応試したのは、陶山書院が嶺南を越えて全国一の書院になれるのに十分なことであった。陶山書院の前面の試士壇がまさにそれを記念する遺跡である。

韓末の儒学者である俔字郭鍾錫は陶山書院を「東方書院の宗」とも称しており、陶山書院は韓国儒学の本山であり書院の象徴として広く知られている。

その一方で陶山書院では退溪学団を導いた「陶山講会」が朝鮮後期になりたつ。陶山書院の講会は、易東講会(1787年)、乙卯講会(1795年)、清涼講会(1850年)、甲寅講会(1854年)、浯川講会(1892年)などの活動が活発に展開された。1854年(哲宗5)の甲寅講会には、当代の嶺南の中心的人物が参加し、翌年に展開された思悼世子の追悼を請願する第2次「嶺南万人疏」と関連があると見られる。

出板と蔵書、古文書

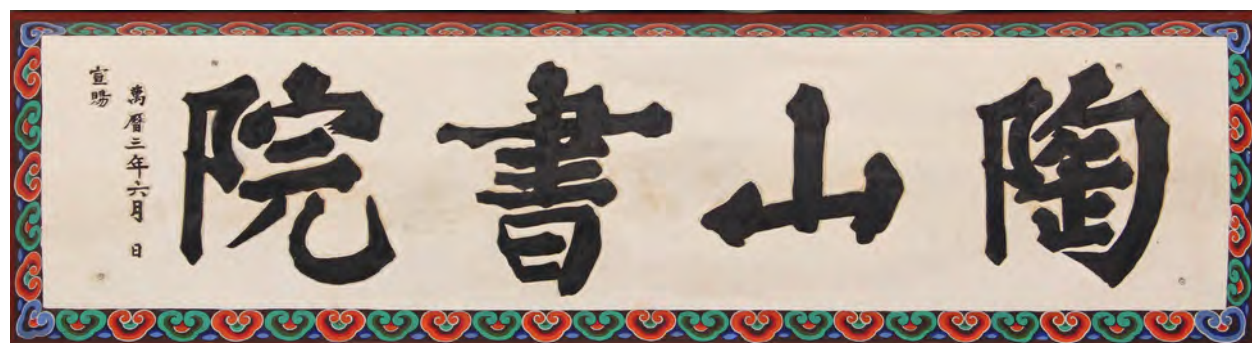
陶山書院は韓国書院の中で学問及び学派の典型を成した代表的書院で、韓国書院の歴史において学術・政治・社会的影響力の面で象徴的な書院でもある。性理学に関する古書、木板を最も多く保有しており、講会録など教育に関する記録も多数保有している。

陶山書院は1600年(宣祖33)には退溪集を刊行し、続いて退溪言行録、陶山及門諸賢録、朱子書節要の刊行を主導するなど、嶺南を代表する書院として多くの書籍を刊行した。そして退溪文集と年譜、朱子書節要、心経など、退溪の主な著書と性理書、また、政府が下げた書籍と地方官庁、近隣書院および門中から発刊、寄贈された膨大な量の資料を所蔵している。

これらの書冊は、冊房と東・西光明室などの書庫を設け管理してきた。古書は1,026種4,605冊である。陶山書院の古書としては、李滉の手沢本と易東書院所蔵本及び陶山書堂所蔵本など壬辰倭乱以前に刊行された書籍が多く残られており、経部が98種614冊、史部が161種1,108冊、子部が63種384冊、集部が704種2,499冊で、合計1,026種4,605冊が伝わる。陶山書院の蔵書は下賜された内賜本が多く、李滉の門道と後学によって積極的に図書が収集された特徴が観られる。

陶山書院の古文書は計2,128点に達し、所志、明文、通文、置簿記、望記、祭文、座目および冊子の形の古文書が多い割合を占める。木板は冊板、詩板、書板、懸板などで計57種4,014点であるが、冊板、詩板、書板、懸板は韓国国学振興院に寄託された。そのうち冊板が28種3,928点として最も多く、詩板は8種43点、書板は9種30点、懸板は12種13点がある。

書院の祭享儀礼において陶山書院は、李滉が制定した祭享儀礼の手続きを徹底的に遵守し、韓国の書院祭享の整形を成す。李滉は紹修書院の笏記を整備する一方、以後に行われる書院の祭享儀礼の原則を制定した。李滉が祀られる陶山書院では李滉が制定した祭享儀礼が厳格に遵守されている。



陶山書院 1575 (宣祖8) 57.5X206.3



典教堂 17世紀末 76.1X208.8



尚德祠 17世紀末 70.0X169.5



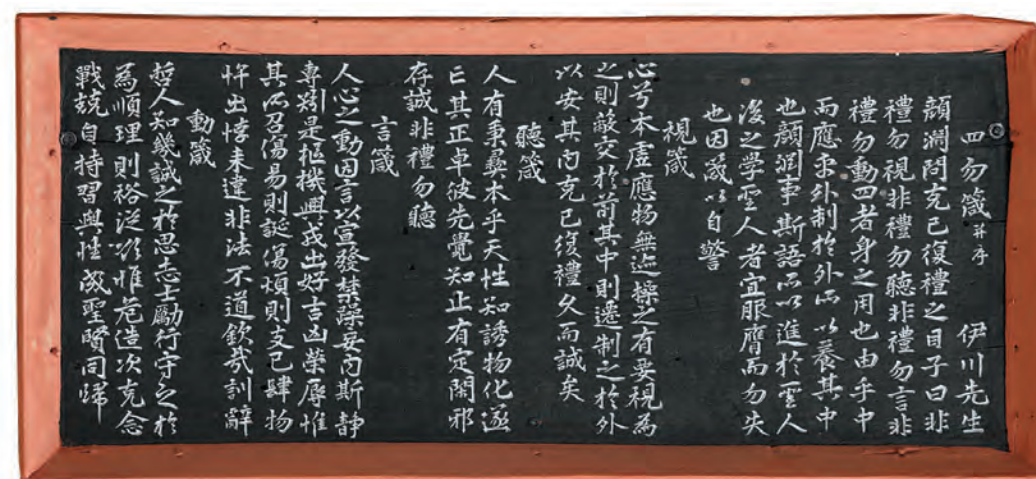
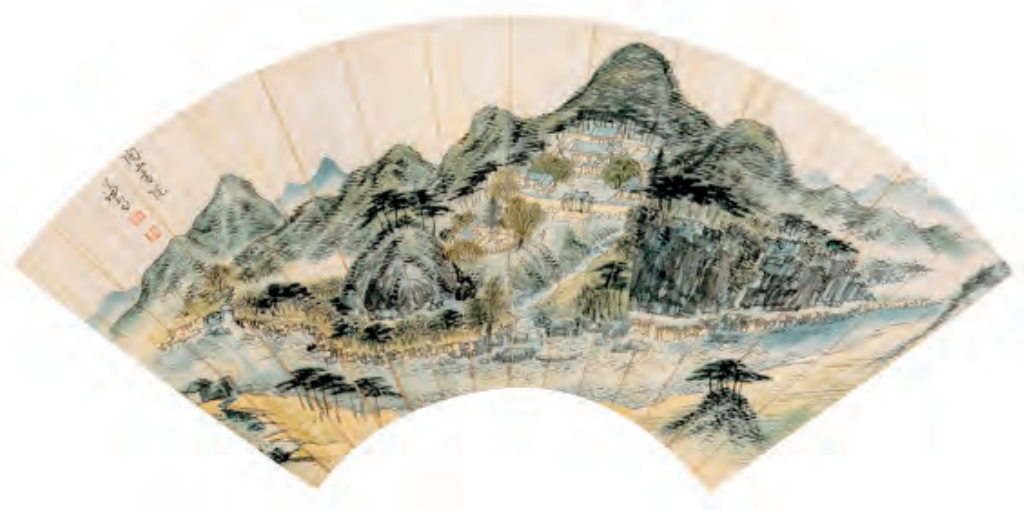
陶山書堂 16世紀 58.5X27.8



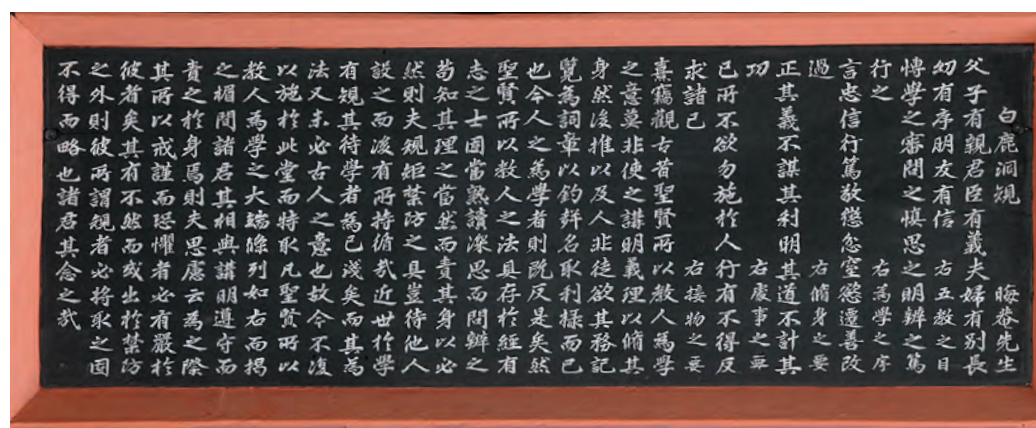
博約齋 17世紀末 53.5X141.5



弘毅齋 17世紀末 58.0X148.0



四勿箴 未詳 37.0X81.0



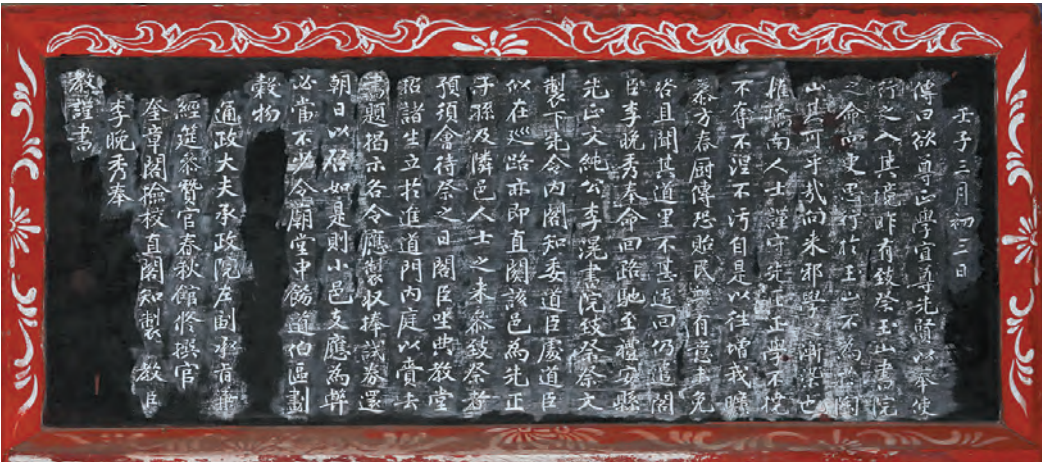
白鹿洞規 未詳 38.0X98.0



院規 未詳 55.5X145.0



遊院錄 1596(宣祖29)-1634(仁祖12) 37.5X26.5



正祖傳教 1792(正祖16) 56.0X82.0



傳掌記 1596(宣祖29)-1634(仁祖12) 37.5X26.5